

平成30年度
静岡県立大学短期大学部

F D委員会報告

I 平成 30 年度 FD 委員会活動について

1. 1 平成 30 年度 FD 活動の基本方針および活動実績

FD 事業本来の目的に立ち返るという基本方針のもと、PDCA の手法を視野に入れて FD 活動の全面的なチェックを行いつつ継続的な事業の実施を行った。

これに従って実施した事業は以下のとおり。

- ・FD 講演会
- ・授業評価アンケート
- ・授業参観・授業公開
- ・FD 新任者研修

以下にその詳細を報告する。

1. 2 FD 講演会

第 1 回短期大学部 FD 講演会 平成 31 年 2 月 19 日（火）14 時 40 分～16 時 10 分

講師：茨城大学保健管理センター所長・教授 布施泰子先生

演題：「大学生のメンタルヘルス―課題と対応について―」

第 2 回短期大学部 FD 講演会 平成 31 年 3 月 19 日（火）13 時 00 分～14 時 30 分

講師：平成 30 年度短期大学部 FD 委員会委員長 吉田直樹先生

演題：「教学マネジメントについて考える―大学基準協会による
内部質保証システム体系図の例を用いて―」

第 1 回の講演会は 40 名近くの参加者が得られ、質疑応答も活発に行われた。

講演内容に対する評価も高かった。一方で、第 2 回は以前から取り上げるべき内容として懸案であった内部質保証関連の内容で講演および研修を実施したが、年度末の時期であったためと思われるが、参加者が少なかった。

開催時期等、来年度は検討が必要と考えられた。

2 授業評価アンケート

学生による授業評価アンケートの実施は、平成 20 年度までは自己点検・自己評価委員会が、平成 21 年度の FD 委員会発足後当委員会が行っている。本年度も従来どおり前期及び後期の教員（専任教員と非常勤講師）が、授業終了前 2 週間の授業期間内で、担当科目の授業終了 15 分前に実施した。

また、原則として教員単位で授業アンケートを実施し、集計結果を各教員（専任教員と非常勤講師）に配布した。

3 教員相互の授業参観・授業公開

領域内で公開授業や模擬授業を行うのは効果的だが、「領域」という考えがない学科もあるため、学科の実態に沿った方法や内容での実施へと見直すこととした。

4 FD 新任研修

昨年度、この事業は当初、教育現場での経験に乏しい医療系の助教を想定して始められたものであり、看護学科の廃止や他大学からの転入者の増加に伴い、委員会内部および研修担当者から内容の変更を検討すべきとの意見が出されていた。それを受けて、教員の経験が浅い新任教員である場合は実施し、すでに教員の経験がある場合は各学科で対応する方法へ見直すこととした。

5 「FD 活動報告書」の編集発行・公開

授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成する。
これまでどおり、①紙（冊子）②DVD（CD-R）③WEBの3種の媒体を作成する。

- ・授業評価に対するフィードバック
- ・授業評価アンケートの現状と課題
- ・授業参観・授業公開の現状と問題点
- ・各種事業の実績報告

本委員会報告書は、授業評価アンケートのフィードバックを含むため、翌年度に前年度委員が作成・公開している。

6 委員会開催回数

4 回

Ⅱ 学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

1. アンケートの実施および教員にコメントの作成について

1. 1. 授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法・内容は、平成 23 年以降変更していない。
実施方法は次の通りである。

①アンケートの実施時期は原則として「最終授業時またはその前週授業時」とした。

②アンケート用紙の配布は教員が行う(原則として授業終了 15 分前)。

③アンケート用紙の回収は学生室が行う。教員が用意した封筒にアンケートを入れ封緘し学生が学生室に提出する。

④学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄のワープロ打ちを外部業者に委託する。

⑤業者から納品された④の教員個々のアンケート集計と自由記述をワープロ打ちしたものを封筒に入れ、FD委員会から各教員へ配付し、「教員によるコメント」の執筆を求める。

⑥上記①～⑤は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。

⑦担当科目のうち、アンケート実施時に受講者が 5 名以下の場合は回答者が特定される可能性を回避するため、アンケートは実施しない。

⑧オムニバス方式等、複数の専任教員で 1 科目を担当する場合、アンケート用紙はシラバスの科目担当筆頭者に配布する。

⑨非常勤教員と専任教員で 1 科目を担当する場合は専任教員がアンケートを実施する。

1. 2. 授業評価アンケート用紙

平成 30 年度のアンケート用紙(次ページに掲載)は、平成 19 年度後期から導入したマークシートを使用した。「I 授業のあり方」、「II 教え方」、「III 総合評価」、「IV あなたの取り組み方」及び教員が自由に質問項目を設定できる「V 自由項目」の大項目の下に小項目とし 19 (各教員が設定することができる自由項目を含む。)の質問が提示されている。

学生による評価は、各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの 5 段階によって行なわれる。自由記述欄は、「良いと思ったこと、感心したこと」、「改善してほしいこと、付け加えてほしいこと」、「その他、この授業についての意見、感想等気づいた点があれば書いて下さい」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生の意見、感想、要望等を具体的に述べられる内容となっている。

使用した授業評価アンケート用紙

授業評価
アンケート

このアンケートは、今後の授業改善の参考資料とすることを目的として、実施いたします。アンケート結果は授業の改善に反映させるものであって、あなたの成績評価に影響を与えるものではありません。集計結果は公表されることがありますが、回答者が特定され不利益をこうむることがないように措置しますので、率直な回答をお願いします。

授業科目

担当教員氏名

学科・専攻

履修形態

学年

歯科衛生学科
①

社会福祉学科
社会福祉専攻
②

社会福祉学科
介護福祉専攻
③

こども学科
④

必修科目
①

選択科目
②

1.記入は、必ずHBの黒鉛筆で、○の中を正確に塗りつぶして下さい。
2.訂正する場合は、プラスチック消しゴムできれいに消して下さい。
3.用紙を、折り曲げたり汚さないで下さい。

良い例

悪い例

下記の項目について、該当する番号をマークして下さい。

	5 そう思う	4 やや そう思う	3 どちらとも 言えない	2 あまりそう 思わない	1 そう 思わない	
I 授業の あり方	(1) 授業の目的、目標が明示されていた。	5	4	3	2	1
	(2) 授業はシラバスどおり、計画的に展開されていた。	5	4	3	2	1
	(3) 授業の目的、目標から見て、授業の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
	(4) 教員から与えられた課題(宿題、レポート)は、質・量ともに適切であった。	5	4	3	2	1
II 教え方	(5) 毎回の授業の量や進度は適切であった。	5	4	3	2	1
	(6) 教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた。	5	4	3	2	1
	(7) 教員の授業に対する熱意が感じられた。	5	4	3	2	1
	(8) 教員は、学生の理解が深まるように授業を工夫していた。 (説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など)	5	4	3	2	1
III 総合 評価	(9) 教員は、学生に対して誠実に対応していた。(質問への対応、レポートへのコメントなど)	5	4	3	2	1
	(10) 安全についての指導や配慮が十分なされていた。(実習科目のみ回答)	5	4	3	2	1
	(11) この授業の内容は良く理解できた。	5	4	3	2	1
IV あなたの 取り組み方	(12) この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった。	5	4	3	2	1
	(13) 自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した。	5	4	3	2	1
	(14) 自分は、この授業に遅刻や欠席をしないように努めた。	5	4	3	2	1
	(15) 自分は、この授業を意欲を持って受講した。	5	4	3	2	1
V 自由 項目	(16) 自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。	5	4	3	2	1
	(17) 自分は、この授業を理解するために努力した。	5	4	3	2	1
	(18)	5	4	3	2	1
	(19)	5	4	3	2	1

授業内容、授業方法などに対する意見を自由に書いて下さい。

・ 良かったこと、感心したこと

・ 改善して欲しいこと、付け加えて欲しいこと

・ その他、この授業についての意見、感想など気づいた点があれば書いて下さい

静岡県立大学短期大学部

ご協力ありがとうございました。

H28. 6

4

1. 3. 教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し非常勤を含め全教員に配信した。

1. 4. 公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『平成 30 年度 F D 委員会報告』に記載し本学 web 上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

2. 教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

i) 専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤こども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

ii) 非常勤講師（五十音順）

学科・専攻:一般教育等 職名:教授 氏名:鶴橋俊宏
対象科目:言語と表現(講義)

本年度はサバティカル研修のため集中講義となったにも関わらず、積極的に授業に参加してくれた学生諸君に感謝したい。

「言語と表現」は「人間理解」に置かれているように、人間の思考およびコミュニケーションと、言語との関係を理解するための科目である。ここ数年は、「定義」「分析」の二つを軸に展開している。これらは論理的な思考の基礎であるが正確に把握されているとは言えない現状を危惧しているからである。

全ての学生が同じスタート・ラインにしていると想定し、独自にテキストを編んでいる。また、医療福祉系の学生にとっては扱う対象がかなり抽象的と思われるので、実生活に即した話題を取り上げ、受講学生とコミュニケーションをとりつつ双方向の講義を行うように心がけている。この点では開講当初より評価を得ていると言える。受講者諸君の積極的な授業参加に負うところも大きかったと思う。

学生諸君には、授業外でも教員の専門知識・知見を活用すべく機会をとらえてほしい。

学科・専攻:一般教育等 職名:准教授 氏名:林恵嗣
対象科目:体育実技(実技)、健康科学論(講義)

【体育実技】

授業の目的・目標は、1)学生が将来的に運動を継続していく意欲を持つようにすること、2)体力を維持・増進させること、そして、3)気分転換を図ること、等である。これらの目的・目標を達成するために、施設・設備面や安全面を考慮した上で、学生が希望した運動(スポーツ)を行った。

ほとんどの項目で学科・専攻平均点を上回っており、良い評価が得られたと考えている。学科・専攻平均点を下回った項目でも 4.60 であり、平均点の 4.65 をわずかに下回る程度であった。自由記述に関してもポジティブなコメントが多く書かれていたことから、今後も学生の希望に沿う形の授業展開を目指して実施していきたい。

学生へ期待すること:授業の中で説明できること・教えられることには限界があるので、自分から調べたり、教員や上手な人・詳しい人に聞いたりするようになってほしい。また、授業でも話をしたが、身体を動かすことが心身の健康につながるため、授業外でも積極的に身体を動かすようにしてほしい。

【健康科学論】

授業の目的・目標は、1)健康と運動の関連性についての理解を深めるとともに、安全かつ効果的に健康の維持・増進のために運動を行う方法を理解すること、2)それを理解するために必要な知識(主に生理学的な内容)を学ぶこと、である。

これまで、社会福祉専攻・こども学科においては、全項目で科目平均点が学科・専攻平均点を下回っていたことから、授業内容を見直し、平成 30 年度から少しコンパクトな内容とした。その結果、社会福祉専攻・こども学科における科目平均点は学科・専攻平均点を上回るか、同じとなった。歯科衛生学科においては、これまでと同様に科目平均点が学科・専攻平均点を上回った。定期的に授業内容は見直していく予定である。

学生へ期待すること:授業内容が分からなかった場合には、まずはしっかりと復習をしてほしい。また、遠慮なく質問をしてほしい。授業時間外でも対応します。

学科：一般教育等 職名：講師 氏名：有元志保
対象科目：英語（演習）、応用英語（演習）

英語の授業では、比較的平易な文章と映像を通じて、世界の国々の歴史や文化について学ぶ教材を使用した。基礎的な英語力の向上とともに、現地の人々の話す多様な英語などに触れ、広い視野を身につけることを目指した。

授業時には口頭と板書によりわかりやすい説明をこころがけ、ペアワークによって文章を音読、日本語訳してもらうなど、発音や解釈に不明な箇所が残らないよう努めた。テーマに関する意見交換の場も設け、協力しながら学習できる環境づくりを行った。

授業評価アンケートや、定期的な実施したテストの結果からは、概ね学習目標を達成できたと判断できる。ただ、能動的な授業参加を促すため、受講者がグループで課題に取り組み、互いに評価し合う機会を作ったが、グループ全員を一律に評価するのは公平さに欠けるという意見があった。この点を今後改善していきたい。

総合的な英語力の向上を目指す応用英語では、英語圏の文化を学んだり、現代社会の諸問題に対する関心を高めたりする効果を期待して、テレビコマーシャルを題材とした。コマーシャルはとっつきやすい印象を与えるが、十分に理解するには相当のリスニング力だけでなく、文化的背景などに関する知識が必要な場合もある。内容を正確に聞き取り、それについて意見を述べるのはなかなか難しい体験だったと思うが、総じて和気あいあいとした雰囲気の中で授業を行うことができた。例年受講者が少人数であることもあり、今後は一人一人の授業に対する要望をより反映させていきたい。

学科:歯科衛生学科 職名:教授 氏名:有泉祐吾

対象科目:病理学(講義)、歯科材料学(講義)、口腔病理学(講義)、
歯科保存学(講義)、臨床歯科医学特論(講義)、救急処置法(講義)、
歯科材料学実習(実習)

I 授業の目標・工夫など

すべての担当科目は、歯科衛生士教育における専門科目である。そこで学生には、まず歯科関係の医療従事者の一員としての歯科衛生士として、それぞれの科目での最低限の知識を修得させることを目標としている。

また常々学生には、知識・技術の前に医療従事者(人)としての心構えが大事であることを強調し、認識してもらうようにしている。

そして講義科目においては、それぞれの科目での必要最低限の知識を修得させることを、また、実習科目においては、講義科目における基礎的知識の理解度をさらに深化させることを目標としている。

今年度も、講義科目においては、主として講義の要点をプリントとして、それに穴埋め形式で記載していく方式を採用した。

また、講義においても、近年とみに増加している『実際に、手に取って見なくては、あるいはやってみなければわからない。』という要望にできる限り応えるために、実物や模型の提示を行った。さらに、今年度も一部の教科においては動画による提示も行い、理解度の深化を図った。

また、実習にあたっては、機器や材料の進歩発達に合わせ、時流に沿った実習となるよう検討し実施した。

一方、原則として、授業の終了前に当日の講義内容確認のための小テストと疑問点あるいは感想等を、実習においては課題(宿題)として実習における理解内容の自己評価と、疑問点あるいは感想等の記載を実施した。これは、授業、実習での学生自身の理解度の深化と、私自身のその授業、実習での学生理解度確認の指標の一つと考えて行っている。

そして、これにより確認された理解不十分と思われる点や質問等は、次回の講義あるいは実習時に出来得る限り回答や解説、追加資料の配布を行い、理解が確実となるよう配慮したことも、例年の通りである。

しかしながら今年度も、ここ数年来ではあるが、質問件数が減少しているように感じられ、簡単な感想にとどまる記載が多くなっているように思われた。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

今年度の評価結果を見ると、科目間での評価に極端な差異はみられなかった。一方、授業内容の理解度においては、不十分ではないかと窺われる学生が存在し、学生間の理解力や学力の差が拡大しているように思われた。

また、例年記載しているが、この授業評価アンケートをさらに有効活用するためには、学力差が感じられることから、学生個々のアンケート項目間の関係提示も必要なのではないかと思われる。

一方、3年生になり学外実習を行うようになると、学内での講義科目の授業内

容の理解度が非常に上がったとの感想を受けたが、これも例年のことであり、前述の実際に体験してみないとわからないとの感想に通じるものと考えられた。これは実際には 1,2 年生時にも、想像や想定して考えて覚えてほしいと説明しているのだが、その時点での理解度アップにはまだ力足らずで、より能動的な授業態度を構築するための工夫をさらに模索しなくてはならないと考えた。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：仲井雪絵

対象科目：①臨床歯科医学序論（講義）、②小児歯科学（講義）、③口腔
発達学（講義）、④口腔衛生学Ⅰ（講義）、⑤口腔衛生学Ⅱ（講
義）、⑥臨床歯科診査法（講義）、⑦救急処置法（講義・教員
3名で分担）

I 授業の目標・工夫

優秀な歯科衛生士を輩出するために、日本一の教育を本気で目指している。
歯科衛生士国家試験の合格は教育目標の最終ゴールではなく通過点に過ぎない。
Advance な内容を教授しながら、出題傾向を分析した上で過去問を練習問題と
して單元ごとに与え、解説を行い、理解度を確認している。

すなわち自然に国家試験対策も網羅できるよう工夫しつつ、臨床現場で実践に
生かせるよう「知識」を「知恵」として修得させることも念頭に置いている。
実際の症例の口腔内写真やエックス線写真等を視覚素材としてふんだんに使用
し、臨床を具体的にイメージさせるよう努めている。

授業内容は、コアカリキュラムを意識しつつアカデミックフリーダムとして歯
科界での最新トピックを盛り込んだ。

毎回配布資料を作成し、穴埋め形式で授業中に記載させる方法を採用している。
またアクティブ・ラーニングとしてミニッツ・ペーパーを導入し、学生の解釈モ
デルを確認し、自分の授業に臨機応変にフィードバックして質の向上に努めて
いる。

2017・2018年度は、日本の歯学部における医療面接教育のトップレベルの研究
者・教育実践者（医療系大学間共用試験実施評価機構委員）を招聘し、本学科に
おいて日本で最先端の歯科医療面接の学修機会を実現化した。

さらに、企業や研究に従事している歯科衛生士を外部講師として招待し、歯科
衛生士というキャリアへの憧れと期待値を向上させて学修への動機づけも図っ
た。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケート集計結果を供覧すると、「I 授業のあり方（5
点満点）」は①4.73、②4.87、③4.81、④4.64、⑤4.88、⑥4.88、「II 教え方（5
点満点）」は①4.83、②4.88、③4.82、④4.75、⑤4.89、⑥4.92、「III 総合評価（5
点満点）」は①4.73、②4.84、③4.64、④4.68、⑤4.84、⑥4.81であった。これらの
評価はまずまずの結果だが、満足してはならない。

講義スライドは前年度のものをそのまま使用することなく、常にアップデート
している。

すべての担当科目において各講義回の2週間前までに該当する配布資料を
UNIVERSAL PASSPORT にアップロードし、学生の予習に役立つ努力をした。
来年度は学務システムの機能をさらに活用し、課題管理によって双方向性の教
育指導に着手する予定である。

現在紙ベースで実施しているミニッツ・ペーパーをデジタル化して効率化でき

ないものか、検討している。⑥の臨床歯科診査法の授業コマの中に医療面接のロールプレイ演習を導入することも検討している。そのファシリテーターとして、引き続き歯学部教育における共用試験機構の医療面接教育で名高い教授陣を外部講師として招待する予定である。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望等

学校で教わることが、あなた方の学すべき全てではありません。未知なるものに対して謙虚に貪欲に勉強する積極性を失わないでください。

自分が一度も見聞いたことも使用したこともないものを根拠無く批判するような「食わず嫌い」にはならないでください。また、無批判で全てを受け入れないでください。

批判的吟味する判断力を常に忘れず、その上で良いと判断できるものを即受け入れる柔軟性を養っていただくことを期待しています。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：吉田直樹
対象科目：生化学（講義）、口腔生理学（演習）、口腔微生物学（講義）、微生物学（講義）、
歯周治療学（講義）、歯科衛生統計学（講義）

I 授業の目標・工夫など

歯科衛生学科の学生は、卒業すると、「短期大学士」の学位とともに「歯科衛生士国家試験受験資格」を取得する。このことは、大きな特徴と捉えることができる。

授業においては、全ての学生が国家試験に合格するために必要な知識を確実に伝え、十分に理解させることを、目標としている。要点を示して、簡潔に伝えることを心がけている。

しかしながら、講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまうのは、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、将来、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。学生は卒業後、学問を続けて行くこととなる。本学に在学している時間よりも卒後の時間の方がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後にも永く持ち続けられるような内容の授業を行いたいと考えている。

日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようにすることを心がけている。

学生自身が「学問」をしているということを感じられること。つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性もあるということを理解させるように努めている。

授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPoint や動画の活用する一方で、重要な項目に関しては、一部分、旧来どおりの板書も交えている。単調にならずにメリハリを利かせるという意図である。また、OHC（Over Head Camera）を用いて、歯科に関する模型や患者説明用の冊子等の現物を、投影して見せるといったことも行っている。さらには、模型等を教室内で「回覧」することもある。

一方通行になりがちである講義の中で、ポイントとなる部分では、時折り、学生に対して直接質問をするようにしている。

また、90 分の講義時間を前半と後半に分け、途中で質問を受ける時間を設けるようにしている。そのことにより、学生が集中すべき時間が 90 分 x1 では無く、45 分 x2 という形になる。より高い集中力で講義に臨めるようにという工夫のつもりである。

学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、やはり学生の

集中力が維持されるように工夫している。

Ⅱ 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケートの結果は、良好であったと考えている。しかしながら、学生が受講した講義に「大いに興味を持った」とは言えないようである。

今後は、学生が講義を受けた後に、その分野に関して自主的に学びたいと思うような状況を生み出したいと考える。理想としては、学生には難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を十分に与えたい。学生が「自ら考えることによって、理解するというところにたどり着いた。」という喜びを得られる機会を多く持てるような授業にしたいと考える。

Ⅲ 学生に期待すること

全ての学生というわけではないが、多くの学生において「丁寧な授業」言い換えれば、「痒い所に手が届く」授業を、良いと考える風潮があるのではないかと感じている。理想的には、希望としては、教員が講義の内容をまとめるのではなく、学生自身が内容をうまくまとめて、自分なりにノートすることができるとが望ましいと考える。学生が、自主的に学ぶという方向に持っていきたいと考える。将来、学生が卒業後に学び続けていく中で、自分自身で能動的にノートをとってほしいと希望する。

個人的には、学生が容易に理解できる授業を行うという方向に、教員が向かわされていることに関して、疑問を感じている。

学生にとって「わかりやすい」授業は良い授業であるのかも知れない。しかしながら、学生が、「わかりにくい」ということを、教える側の教員が悪いということにしてしまい、「わからない」ということを自身で解決しようとしないようではいけない。全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまうことは、本当に望ましい状況と言えるのだろうか。わかりにくく表現されたものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。

実は、社会人になってからは、そのような能力は無くてもならないものだと思う。

学生には、容易にはわからないものに対して、「面白い」、「挑戦してみたい」、と思うような気持ちを持ち続けてほしいと希望している。

また、学生がそういった気持ちを生み出せるような手助けを、教員として行いたいと考える。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 准教授 氏名: 野口有紀

対象科目: 歯科衛生学総論(講義)、地域歯科保健論(講義)、歯科衛生士業務記録法(講義)

地域歯科保健実習(演習)

I 授業の工夫など

専門分野における知識・技術・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目標とした。基礎と専門科目、座学と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- ・ 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の調査結果および原著論文を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- ・ 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を使用した。
- ・ 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう講義終了ごとに小テストを行った。小テストは国家試験に準じた形式で行った。答えあわせおよび解説を行い、理解の確認と定着を図った。
- ・ 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- ・ 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用い、書き込みをかねた資料として配布した。
- ・ 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- ・ 理解度に合わせた指導の工夫として、質問事項を用紙に記載し提出し、対処した。成績評価の工夫として、筆記試験に偏向しない多元的成績評価をした。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業アンケート集計結果の「I 授業のあり方」「II 考え方」「III 総合評価」「IV あなたの取り組み方」のすべての項目において、平均点が概ね 4.70 以上で良好であった。学生主体授業の取り組みなどにより、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。

今後も同様の手法を用い授業展開を図っていく。さらに、学習意欲を高め、理解力が深まるよう下記について改善・工夫に努めたい。今後の改善点として、「疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目の平均点が、他の項目に比べ若干低い傾向であった。質問できる環境づくりとして、授業ごとに質問事項の記載提出、オフィスアワーの周知など改善をする。地域歯科保健実習の科目の「教員から与えられた課題は、質・量ともに適切であった」の項目の平均点が、低い傾向がみられた。課題の質・量について改善していく必要がある。今後も、学習意欲を刺激し、分かりやすい授業運営が出来るよう努めたい。

III 学生に期待すること・学生への要望等

予習・復習の課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てることができるようにして欲しい。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：森野智子
対象科目：歯科保健教育法（講義）、歯科衛生倫理（講義）、コミュニケーション
演習（演習）、歯科診療補助・支援実習Ⅱ（実習）

I 授業の工夫

授業は、「根拠ある知識を身につけ、論理的な思考力を育み、さらに行動に繋げること」を目指し、多くの内容を盛り込んで授業を組み立てています。具体的には、1年次の概論科目において、新入生でもわかり易い到達目標を示すことにしています。

2年次の授業においては、歴史的な事実から現在進行中の事例まで、数多くの情報を紹介し、演習では思考の機会を設け、考えながら手法や技術が定着することをとおして、後期の学内実習で総まとめするようにデザインしています。

授業では、根拠を明確にした説明を最優先にしつつ、身体や心を動かす機会を持つような授業の提供に努めています。また、学生の参加評価が低い傾向がある、「自分（学生）は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」については、授業の終わりに質問時間をとったり、レポートに質問記入欄を設けたりするようにして質問の機会を増やす努力をしています。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「歯科保健教育法」「歯科衛生倫理」「コミュニケーション演習」「歯科診療補助・支援実習Ⅱ」の授業評価アンケート結果は「I 授業のあり方」の平均点はそれぞれ 4.79、4.82、4.90、4.80、「II 教え方」の平均点は 4.94、4.83、4.87、4.88、「III 総合評価」の平均点は 4.90、4.76、4.88、4.82 で概ね良好でした。ただ、これを見ると、ごく僅かではあるものの、後期開講科目のほうが前期科目より学生評価が低かったことから、後期になると、学生の学習意欲が下がりやすいことが評価に影響したとも考えられるので、後期科目はより学習意欲を高められるような授業手法を取り入れたいと考えています。

一方、「IV あなたの取り組み方」の平均点は 4.51、4.66、4.85、4.76 で、なかでも、「歯科保健教育法」は学科平均点 4.57 より 0.06 低く、特に「自分（学生）は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」が大変低い (3.75) 結果になりました。

毎年、授業の終わりに必ず質問時間をとったり、毎回提出してもらうレポートに質問記入欄を設けて、必要に応じ、全体や個人向けの回答をしているにもかかわらず、今回も本評価が低かったことから、今後は、直接学生に原因を尋ねたりしてその改善を図りたいと考えています。

歯科衛生学科の学生は、歯科保健指導に対する興味を持っているものの実際に指導を受けた経験が少ないことから、大学教育においても早期に歯科保健指導の機会を与える必要性を感じました。

今後も、学生の日常や背景を理解することで、ニーズにしっかり答えるような教育を行いたいです。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望

学生が出席するのが楽しみだと思えるような授業を提供するように努めています。社会人になる前に、大学で学ぶ意味を考えて、能動的に授業に参加して下さることを願います。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 講師 氏名: 山本智美

対象科目: 歯科予防処置論(講義)、感染予防法(演習)、齲蝕予防処置実習(実習)

I 授業の目標、工夫、自己評価

「歯科予防処置論」では歯や口腔の健康の保持増進の考え方、予防方法等について理解することを目標とした。歯科疾患実態調査の結果(平成28年)や関連する最新のデータを提示し、わが国における口腔保健の現状について考える機会とした。

う蝕、歯周疾患の原因とその予防を中心とした口腔保健管理について理解を深めるために、各自の口腔内におけるプラークコントロールの演習を実施し、口腔衛生について関心が高まったと思われる。ライフステージにおける口腔保健管理については妊産婦期、乳幼児期から老年期まで具体的な事例や体験談をもとに、問題点や改善点を検討することにより人々の生活、環境等と歯・口腔の関わりについて関心が高まったと思われる。

「感染予防法」では歯科医療における感染予防の意義を理解し、感染予防対策の原則、滅菌・消毒等に関する基本的な知識を習得し、歯科医療現場における医療安全について理解することを目標とした。感染症や予防対策について考える機会として、B型、C型肝炎の感染経路や訴訟問題について講義前に事前課題レポートを課した。講義後の感想から予習したことにより理解しやすかった等、事前学習が効果的であったことがわかった。手指消毒の演習では手指の汚染状況の確認、滅菌・消毒・洗浄の実際について実習室の器具器材等を目で見ても実際に体験することにより、歯科医療における感染予防対策を身近で知ることができたと思われる。

「齲蝕予防処置実習」では、う蝕予防に関する知識と技術を習得することを目標とした。講義で目的、術式、注意事項等を説明後、実物の提示・回覧を行い次回実習での理解が深められるよう努めた。また相互実習の前に模型実習を行うことにより手順やポイントを把握でき、相互実習にスムーズに移行できたと思われる。

相互実習では患者は小児であることを想定し声かけ、対応、説明を相互に体験した。相手の立場になってわかりやすく伝えることの大切さや安全で確実な操作を行うこと、注意事項等について、各役割を体験することにより理解が深まったと思われる。実習中はモニターに手順等を写し、確認しながら実習が進められるよう工夫した。

アンケート集計結果ではいずれの科目も学科平均点を上回っていた。感想・質問や提出レポートに対してはコメントを記入し丁寧な対応を心がけ、この点については学生のコメントからも高評価を得たと思われる。

II 今後の改善・工夫、学生に期待すること

なぜそうしなければならないか、学生自身が疑問をもち授業に参加できるよう工夫を行っていききたい。また疑問点を質問する点については、他の項目より

点数が低い傾向がみられたため、事前学習の効果があったことから予習や復習に積極的に取り組んでもらいたい。また実習のため準備から片付けまでの時間を把握したうえで授業を計画し、授業時間を厳守したいと考える。

また実習終了後の課題である考察レポートの書き方について、話し言葉をそのまま文章にする等、未熟な学生が見受けられるため、書き方については随時、指導するとともに、学生には次第に適切な文章表現ができるよう課題に取り組んでもらいたい。

学科:社会福祉学科 職名:教授 氏名:佐々木 隆志

対象科目:老人福祉論(社1・講義)、高齢者の生活の理解Ⅰ・Ⅱ(介1・講義)、児童福祉論(介2・講義)、社会福祉論(歯2)保育実践演習・卒業研究(社2・演習)、社会福祉演習(社1・演習)、ソーシャルワーク実習指導(社2・学内指導)、ソーシャルワーク実習(社2・実習)、

平成30年度の授業評価の中で評価できる点は、介護福祉専攻2年で開設されている「高齢者生活の理解Ⅰ」及び「高齢者の生活の理解Ⅱ」でそれぞれ、学科・専攻の平均値を上回ったことである。同科目はこれまで、国家試験があり、国家試験を意識した講義展開が要求されている。平均的に授業のあり方、教え方などは高い評価を今年度得て、この結果を筆者が分析したところ、自由記述の中で昨年度の講義における指摘事項の改善に努めたことが大きかった。

板書の仕方、講義の進め方など、学生の反応を見ながら講義を丁寧に進めた。また、講義の冒頭には、本時のねらいを明確し講義を導入、展開、まとめを意識しながら授業を行った点が評価できる。しかし、この方法は、毎年学生が違うため同一の講義方法は意味をなさない。

自由記述の中で「良いと思ったこと」、「感心したと思うこと」の項目では、この講義を通して「自分の老後のあり方を考えるような機会になりました」等の意見が全担当科目にわたり見られた。今後も高齢者の生活の理解や児童福祉については、近年の児童虐待問題や少子化の社会的背景及び課題について、事例を取り入れながら常に授業展開を工夫し、学生の理解度に配慮した授業を進めていきたい。

社会福祉専攻「老人福祉論」では、講義の工夫に、相談援助の視点から老人福祉の理念、老人福祉論の体系、サービスの利用の仕方、人権擁護の視点から講義を進めた。

なかでも、近年の高齢者虐待の現状をどのように受け止めるか。無届け老人ハウスが全国的に増えている傾向のなかで、介護を必要としている方々が、サービスを受けられない状況にある点を意識しながら講義を工夫した。全体的には高い評価を得ていた。

評価全体をみると、「Ⅱ，教え方」部分で学科全体の平均値に位置する。「毎回の授業の量や進度は適切であった。」「教員の授業に対する熱意が感じられた」の項目が高い評価となっている。自由記述の部分では、「板書がとても見やすかった」「授業がおもしろかった」

「板書が終わるまでまってくれた」等があり、「改善して欲しいこと」では、「字が少し読みにくい」「授業変更がユニパにはんえいされていない」等があった。また、老人福祉論の「授業のあり方」では社会福祉専攻全体の平均よりも高い傾向にあった。いつの学年でも感じる点は、学生層は毎年異なり学生のニーズに合った講義が常に求められていると思う。

さらに、高齢者分野では、制度の変化が速く、常に最新の情報を学生にわかりやすく伝えること。あきない授業、あかるい授業、ユーモアのある授業、教員自ら明るくなければ、明るい講義は限界があると思っている。今後も対象学生が異なる点を意識しながら、学生の学ぶ視点・視線に合った高等教育を保障し、質の高い講義・演習を進めていきたい。学生のコメント・評価に深謝します。今後も講義の改善・満足の行く講義に努めます。

評価者のみなさん、ありがとうございました。

学科:社会福祉学科 職名:教授 氏名:三田英二

対象科目:

・保育の心理学Ⅱ(演習)、心のしくみ(講義、分担担当)

I 授業の目標・工夫など

昨年度同様、「臨床心理学」(講義)は、受講生が少数であったため、評価対象から除外されている。

社会福祉専攻、こども学科で開講される「保育の心理学Ⅱ」は、演習科目である。しかし、基本的な知識が少ない中での演習は、受講生に、演習の方向性に戸惑いを感じさせると考えており、授業スケジュールの前半は、保育士養成カリキュラムで指定されている内容にそった演習になるような内容を取り上げた講義を行った。

介護福祉専攻で開講される「心のしくみ」でも、例年と同様の記載になってしまうが、相談援助に活用できるような内容も含めるように講義を行った。これは、介護福祉士に期待される職務内容が、介護技術だけではなく、相談援助も期待されているためと考えているからである。これはもちろん、以前から記載しているように、カリキュラム改定により、2年次開講の「相談援助の理論と方法」が、廃止されてしまったためである。

社会福祉専攻とこども学科では、保育士資格取得のための選択科目として、「臨床心理学」が設定されているが、前述のように、受講生が少数であったため、評価対象とはならなかった。講義内容としては、相談援助を多角的に考えられるような授業展開をしていることは紹介しておきたい。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

毎年のことなので、例年通りの記述になってしまうが、アンケートの評価点は、標準偏差を加味して考えれば、概ね、平均的な評価であったと考えている。

例年記載していることであるが、科目の特性上、座学になってしまう「心のしくみ」においては(評価対象外となった「臨床心理学」も含め)、たとえ話(先行オーガナイザー)を多用し、出来る限り、多くの学生の興味・関心を引けるように心がけている。

今後も更に興味・関心を持たれるような先行オーガナイザーに心がけたい。「保育の心理学Ⅱ」も後述するように、座学となる部分がある。同様の対応をしていきたいと考えている。

前年度同様の記載になってしまうが、「保育の心理学Ⅱ」は、前述のように演習科目であるが、演習につながるように講義期間前半は講義を行ったことは、前述の通りである。その後、講義期間後半でグループ発表を行い、発表内容に関してのコメントをするかたちで、重要なポイントや関連事項など説明を行った。

当該年度も、受講生の発表内容、プレゼンテーションの仕方など高く評価できるものであった。次年度は、授業名が改訂される。授業名改訂に沿った内容になるよう授業展開を工夫していきたいと考えている。

学科:社会福祉学科 職名:准教授 氏名:江原勝幸
対象科目:社会福祉原論(講義)

I 授業の目標・工夫など

授業の目的は「社会福祉の原理と理念、歴史、法・制度等の基礎構造について体系的に理解する」こととし、授業の到達目標を以下に設定した。

- 1) 社会福祉の原理、対象、歴史、援助技術、担い手、組織運営と経営、制度など社会福祉の基礎構造を支える理論・仕組み（原論）を説明することができる
- 2) 社会福祉について自分自身の生活から見つめ直し、自分の言葉で「社会福祉とは何か」を述べることができる。
- 3) 新聞記事・テレビ番組などを活用し、狭義の福祉に限らず、現代社会の福祉的諸問題の光と陰について考察することができる

これまでの授業評価において、ビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、その時々で話題・問題となっていることを取り入れるように工夫した(H30 年度は、自宅監禁、医ケア児教育、名古屋城エレベーター、若年層性被害、引きこもり支援など)。また、障害当事者、障害者相談支援事業所職員、引きこもり問題に取り組む NPO 代表をゲストスピーカーに招き、授業内容と関連付けて自立や寄り添い支援など社会福祉の基盤である価値や倫理について実践的に学ぶ機会を複数回設けた。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

社会福祉専攻及びこども学科 1 年次通年の講義科目であり、社会福祉の原理・原則、歴史、制度などの基礎構造を理解する重要な科目である。通年という利点を生かし、前期で原理・原則を中心に基盤を押さえ、後期に制度・歴史について理解を深める段階的・発展的な内容・方法を用いている。授業のあり方や教え方などは基本的に変更せず、教本を使用しない授業の 5 年目である。授業はレジュメと関連資料（主に新聞記事）を毎回配布し、ポイントを押さえた授業展開を進めた。視覚に訴える授業は学生が興味を持ち、理解度も高まるため、ほぼ毎回授業に関連するビデオ映像を用いた。単純なビデオ視聴では授業との関連性が低くなるため、その感想・意見等を書き込んで提出するワークシートを作成し、配布・記入後の回収をした。

全体的に平均点はほぼ昨年と同様であり、「I 授業のあり方」「II 教え方」「III 総合評価」は学科・専攻平均点を上回った。評価項目で最も低いのが #16「教員への質問」3.85(次に低いのが #15「意欲的受講」と #17「理解への努力」という結果であった(他項目と比べ「どちらとも言えないが」26.4%と多い)。このことを踏まえ、特に今年度の後期授業がこれまで社会福祉専攻のみと学生数が 26 名と半減することもあり、アクティブ・ラーニングを取り入れた学生の主体的取り組み方を促す工夫を実施したい(なお、介護福祉専攻(履修者数 27 人)「社会福祉 II」では学生による課題調べと発表を行い、「IV あなたの取り組み」は 4.67 と学科・平均点を 0.28 上回った)。

学科:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:奥田都子

対象科目:家族支援論(講義)、保育表現技術Ⅰ(造形)(演習)

家族福祉論(講義)、生活支援技術Ⅰ(演習)、介護レクリエーションⅠ(演習)

I 授業の目標・工夫など

「家族支援論」は、社会福祉専攻とこども学科で開講される保育士資格取得必修科目である。

社会福祉専攻の受講生の大半は社会福祉士(受験基礎)資格を目指し、こども学科の受講生は保育士と幼稚園教諭資格を目指している点で、両学科の学生の児童家庭福祉関連の知識は若干異なるが、既習科目内容との重複をできるだけ避け、支援対象となる家族そのものへの理解を深めることに重点をおくとともに、保育現場における具体的な家族支援の技術習得を目標とし、ディベートやロールプレイなどの演習を取り入れている。

「保育表現技術Ⅰ(造形)」も、保育士資格取得に必修の科目であり、社会福祉専攻とこども学科の学生が受講対象である。

専任の美術系教員から種々の技法を学んだのちに、グループでの壁面構成で素材の使い方を実践的に学び、最後に個人の小作品に取り組むことで、様々な技法や素材を用いた製作が可能になる環境を整えた。

介護福祉専攻の「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」については、いずれも家族の福祉ニーズに目を向け、生活の諸問題を解決していくための知識や技術、考え方を身につけ、問題解決能力を養うことをねらいとしており、自分自身の生活上の問題に目を向けることから始め、最終的には、援助者として福祉サービス利用者とその家族の生活を支援するための生活支援能力を養うことを目標としている。

「介護レクリエーションⅠ」は、福祉現場におけるレクリエーション提供に向けて、生活文化を活用したレクリエーションの理論と実践について演習を通して学ぶことをねらいとしている。

II アンケート結果に対する自己評価と今後の改善・工夫

「家族支援論」は講義科目であるが、授業で学生の反応の良かったディベートを今年も1回取り入れ、後半では保育現場での具体的な家族援助場面を想定したロールプレイを行った。

そのねらいは保育士と保護者の両方の立場と意思について考え、演じることを通して援助のありかたについて体験的に学ばせることにある。

集計結果についてみると、平均点ではおおむね好評価である。

自由記述は18件中、14件がロールプレイに言及しており、「ロールプレイの中の状況がかなり具体的で有意義なものになりました」「ロールプレイを通じて保育士の対応だけでなく保護者や子どもの気持ちも考えることができ充実した時間でした」など概ね良好であり、この方式による授業運営は、講義を通して学び、考え、行動することに貢献していると思われるので、今後も継続・拡充していきたい。

「保育表現技術Ⅰ(造形)」では、できる限り学生の希望通りの素材を準備したことや、作品へのプラスのコメントに対して学生の評価が高く、製作の楽しさを述べるものが多かったので、今後も材料準備に手を抜くことなく、こまめにコメントしていきたい。

また、「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」では、生活上の問題に気づかせ、その解決・改善に向けての行動や社会資源の活用についての検討を通して援助のプロセスを学んでいくが、介護技術に比べると「この知識・技術を習得した」「できなかったことができるようになった」という明確な実感や達成感は生じにくい。そこで、授業では福祉サービス利用者が生活場面で問題に直面する事例を設定して、学んだ知識や技術をどの様に用いれば生活支援に役立つのかを体得することができるようにワークシートを用いたり、ロールプレイを通して実践的に考える機会を設けている。また、生活支援技術Ⅰでは、身近な高齢者・年長者へのインタビューを課し、そのライフヒストリーを作成するという課題に取り組ませることも例年行っている。

アンケート結果をみると、家族福祉論では 43 件の自由記述があり、大変良好な結果が得られた。代表的なものをあげると、「**現実問題や事例を踏まえた授業**はとても興味が惹かれる内容で、新しい知識となる部分が多く、選択してよかった。地域福祉関係も多々あり、面白かった。」「**体験談が多く**、説明が細やかでとても分かりやすく、想像、共感がしやすかった。ロールプレイは良い体験になった。」「**ロールプレイを行うことで、利用者や家族の気持ちを考える機会**となり、介護者としてどのような支援をするか考えることができた。」などである。これらの自由記述を概観してわかることは、教科書の内容・知識として示されるよりも、学生にとっては体験談として示されるほうが定着しやすく、現実問題や事例に即して、自分ならどうするのかを考え、ロールプレイを通して演じることによって、知識や技術を修得しやすいということである。

ロールプレイについての肯定評価が多く見られることから、大多数の学生にとってはこの方法が効果的であったと判断できる。とはいえ、グループワークはメンバー構成によっては話し合いや作業が進まずに遊んでしまう危惧もあり、すべてのグループが時間内に課題を達成できるとは限らないため、グループのメンバー構成を見ながら教員が随時声をかけ、助言を与えるなどの工夫を行ないたい。

「**介護レクリエーションⅠ**」については、座学による理論編と、グループワークによる実践編を組み合わせた授業展開を工夫したが、アンケート結果から、グループワークにおける制作や実践の満足感が高く、理論編への反応は得られなかった。この結果から、座学での理論編については、実践と連動させることによってわかりやすく伝える工夫をしていくとともに、グループワークの意欲を維持できるように、時間配分などに細かい配慮を加えていきたい。また、改善して欲しいこととして、時間の少なさについての指摘があった。

8 回という限られた時間の制約の中で圧縮した授業展開のため、このような不満が出てしまうことは無理もないが、かつては 15 回であったことから、2 年後のカリキュラム変更に向ける課題として考えたい。

全体の総括として、グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式は、舵取りの難しさもあるが、学生の学ぶ意欲を喚起し、授業への関心を高めることには大

いに効果があったと感じる。また、自由記述では、(作品や発表への)適切なコメントや、リアクションペーパーへのコメントなど、学生が授業を通してのキャッチボールを期待していることがわかった。そのわりには、コメントに対する学生からの反応はほとんどないといってよいのだが、コメントがないことに不満を述べる声もあるので、今後もコメントはしていきたい。

人前での質問ができない学生たちであるが、リアクションペーパーを通しての質問は、こちらが答えるほどに活発になっていくことも実感できた。

今後も、学生とのキャッチボールを心がけ、意欲を引き出す工夫を続けていくとともに、ディスカッションのまとめ方やプレゼンテーションの方法に工夫を盛り込みながら、学生が自分から積極的に取り組めるような授業方式を探していきたい。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:中澤秀一

対象科目:社会保障論(講義)、社会保障論(講義)、公的扶助論(講義)、公的扶助(講義)、
保育実践演習・卒業研究(演習)

I 授業の目標・工夫など

講義科目については、これまでと同様に一方的なインプットのみにならないように、復習テストの時間を取ったり、発言の機会を設けたりして、講義の時間内にできるだけすべての学生にアウトプットの機会を設けるようにした。

パワーポイントを利用した授業展開が多いなかで、時おり身近な話題に触れながら、より理解度が高まるような工夫を加えていった。そのようにした結果か、授業アンケートの自由記述欄には「資料やプリントによって授業が進められているので、講義の内容を理解しやすかった」「授業のすすめ方がテンポ良かった」「分かりやすく、とても興味深くて楽しかった」等のコメントがみられた。

ビデオ教材は、出来るだけアップデートな内容のものを採り入れるようにして、学生がいま社会で問題になっていることに触れられるようにした。このような工夫は今後も続けていきたいと考えている。

演習科目については、プレゼンテーション能力を培うために、できるだけ学生自身に発表させるようにした。卒業研究としては、平成の30年間を振り返り、仕事と暮らしの変遷について取りまとめた動画を協力して作成した。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業評価アンケートの結果では、「授業はシラバスどおり、計画的に展開されていた」については、社会保障論(社会福祉専攻1年)で4.85(4.95)、公的扶助論(同2年)で5.00(4.95)で昨年よりも平均点が落ちた科目もあるが、概ね水準は保てたと感じる(括弧内は29年度同科目における自身の平均点) 今後も授業準備を怠らないようにしたい。

教え方については、「学生の理解が深まるように授業を工夫していた(説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など)」については、社会保障論(社会福祉専攻1年)で4.90(4.59)、社会保障論(介護福祉専攻2年)で4.52(4.52)、公的扶助論で5.00(4.68)、公的扶助で4.38(4.40)等であった(括弧内の数字は学科・専攻の「II 教え方」の平均点)。学科・専攻平均により評価が異なっていた。今後の授業運営に活かしたい。

総合評価では、「この授業の内容は良く理解できた」=4.65、「この授業は、新たに考えた
り学んだりすることの多い内容であった」=4.85、「自分は、この授業を受けて、この分野
に対する興味、関心が増した」=4.75と、学生からは高い評価が得られたと考えている(社
会保障論、社会福祉専攻1年))。

今後も学生の意見や要望に、その都度耳を傾けながら、それを授業に反映させていくこと
を心がけていきたい。

学科名：社会福祉学科 職名：准教授 氏名：松平千佳

対象科目 ソーシャルワーク論Ⅱ ソーシャルワーク演習Ⅰ ソーシャルワーク実習指導
ソーシャルワーク実習 学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ(入門編)」「ホスピタル・プレイⅡ(障害児編) ホスピタル・プレイ・スペシャリスト養成講座

I. 授業の目標・工夫など

1年間のサバティカル研修終了後の授業担当だったため、学生の反応が不安であったがすぐに演習的な内容の多い授業になじんでくれたように思う。確かに、24名の学生数のため、ディスカッションやグループ活動において、学びを深める交流を促進することが難しい側面もあるが、丁寧に一人一人にかかわることが出来るというメリットもある。

ソーシャルワーク論Ⅱにおいては、複雑化する現代社会の状況を踏まえ、クライアントの権利擁護者として援助実践ができるように授業の目標を設定している。

対人援助は座学で学ぶだけでなく、実際に援助ができるようになることが重要であるため、グループワークや、調べ学習、また身近でタイムリーな題材を用いて対話形式の授業を展開し、ソーシャルワーカーとしての働きを学べるように工夫している。

学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ・Ⅱ」では、現場で働くHP Sが実際に自分の勤める病院や施設で用いるホスピタル・プレイをふんだんに紹介する内容にしている。このような講義ができるのは本学唯一であり、県大の学生も見学に来るなどしている。

動画なども多く使い、視覚的、実践的な学びを行うよう工夫している。また、障害児とかかわる際に役立つツールなどを作り、体験的に医療と遊びを融合させる方法と効果を学習する工夫を行っている。

実習指導については、複数担当制であるためスタンダードを設定することが難しいが、少人数で学べるメリットがある。実習という緊張感を要する学びが効果的に有意義に遂行されるように、各教員が強みを生かし工夫しているところが良い点である。

II. 授業の自己点検・自己評価

上記したすべての科目及び評価項目において、4.5以上の結果が出ており、満足している。自由記述においても、「深く考える授業だった」「しんどかったけど楽しかった」「自分について多くのことを考えて元気になった」など、ソーシャルワーカーになるための思考が進んだことが分かる記述があり大変うれしかったと感じた。

何かを記憶する学びではなく、人が人を援助する意味や価値を考えていくことに意義を見出していることが、学生の感想からもうかがえる。

かなり大きなつまづきや、家庭の問題など複雑な社会的な問題を抱えている本学の学生にとって、社会福祉の学びは自分に引き付けて考える内容が多い。

福祉の課題を自ら体験している学生には自己覚知が重要であり、その過程をコーチングしていく教員の立ち位置に気を付けていきたい。

Ⅲ. 授業改善の展望

継続して、授業の中で扱うテーマも進め方にも配慮が必要である。

教室のP Cが不調で、動画がうまく見せられない場面があり、そのことを残念がる学生の感想があったため、学生室には施設整備をお願いしたい。

学科・専攻:社会福祉学科社会福祉専攻 職名:講師 氏名:佐々木将芳

対象科目:児童家庭福祉(講義)、ソーシャルワーク論Ⅰ(講義)、ソーシャルワーク論Ⅳ(講義)

Ⅰ. 講義におけるねらいと工夫

児童家庭福祉(通年)およびソーシャルワーク論Ⅰ(前期)は1年次配当科目であり、学生にとって社会福祉における基本的理解を促す意味も持っている。その意味でそれぞれ、現代社会における子ども家庭福祉の重要性を理解することや、基礎的な導入およびソーシャルワークを支える理論的な基盤を学ぶことを目的としている。

また、ソーシャルワーク論Ⅳは2年次(後期)配当科目となっているため、ソーシャルワーク実習を終えた学生に対して発展的理解とソーシャルワークにおける価値・技術の再確認という位置づけで講義を行った。

Ⅱ. 講義についての自己評価と今後の改善・工夫

上記のようなねらいに沿って、それぞれの講義では可能な限り具体的な事例や社会問題を提示し、学生にとって各回の内容をイメージできるよう心がけた。特に1年次科目については社会福祉やソーシャルワークという言葉、内容に初めて触れるケースも考えられるため、より丁寧に語句の説明なども行った。

2年次科目では、学生のそれまでに行ってきた各実習での経験も可能な限り振り返られるよう心がけ、学生自身の経験、体験と理論が結びつけられるように講義を進行した。

児童家庭福祉は、その意図を理解されたように見受けられる。

学生にとって、「新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」や「授業に意欲を持って受講した」について、ほぼ専攻平均と同様の数値かつ標準偏差の低さからそれが読み取れる。しかし、ソーシャルワーク論ⅠおよびⅣについては専攻平均から低い項目や標準偏差の値が大きい項目が見られたため、ねらい通りの講義を展開できたとは言い切れない面がある。

本学に赴任し1年目でもあり、実習の特徴や学生の雰囲気など教員も学びながら同時進行で講義に要素を落とし込まなければいけない中で、十分な対応が出来ていなかったことは反省点であり、今後の改善項目として活かしていきたい。

Ⅲ. 学生に期待すること

専攻平均でも同様の傾向が見られることだが、疑問点などについて質問する学生の少なさが気になる点としてあげられる。

講義の中で必ずしも受講者全員の理解度に合わせた進行ができないケースもある中で、学生自身が主体的に自らの進行業況を理解しそれを補うような姿勢を期待したい。

また、教員としても学生の知りたい意欲や学びたい要求に十分応えられるよう、質問・疑問を問いかけて促すような工夫を行っていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:助教 氏名:加藤恵美
対象科目:保育者論(講義)

I. 授業の工夫

保育者論では、保育者の役割、倫理、専門性、協働、キャリア形成に関する知識の習得とともに、それらが求められる理由と意味を履修生自身が考察することに重きを置いた。知識として理解するだけでなく、自分自身の価値観や考えを客観視し、整理することが実践の土台になると考えるためであった。

具体的には、小課題について履修者自身で考え、意見をまとめる時間を設定した後、グループワークで意見の交換・共有を行った。

さらに、グループディスカッションの結果を発表し合うことを通して、多様な意見を知り、課題の理解と自分の考えを深める機会を持てるようにした。

保育士の専門性を学ぶこととともに、保育士が、子どもの直接的援助とともに、その取り巻く環境を理解し、改善に努めることも役割のひとつであるため、保育所保育だけでなく、幼稚園、学校、家庭や地域で多様な環境に生きる子どもの理解も重視した。そのため、優れた実践が記録されたナラティブ教材(当事者の語り:映像作品など)を使用した。

視聴の際は、①着目点を提示した上で、個人としての感想と、保育士の観点からの感想と考察を記述する課題、②保育内容を体験的に理解できるよう、保育実践のドキュメンタリー番組を視聴し、実践の観察記録をとった上、保育指針に照らし合わせて分析する課題などを設定した。

さらに、保育をめぐる様々な社会的な課題の理解を目的として、実際に起きた事件や事故の事例を用いて、子どもと保護者の置かれた環境や問題を身近に感じながら、そのニーズを探索し支援方策を考えるワークシートの作成なども行った。

保育士としてのキャリア形成の基盤として、そして自身の権利擁護を目的として、雇用労働者としての権利と、労働環境・条件の改善の方法に関する授業を行った。また、保育士の専門性に関する最新の研究知見を活用し、保育分野の動向なども紹介した。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

知識の習得とともに、履修生自身が考え、学びを共有しあうことで理解を深められるようグループワークを行った。

互いに意見を述べ合う様子と発表の内容から、また、リアクションペーパーから、保育士に倫理が求められる理由、他の人の意見を聞くことの意味、自分自身の価値観の振り返りなどの記述がなされており、これらの結果と期末試験の結果と合わせて、授業目標は概ね達成できたと考える。

また、保育所保育に限らず、社会福祉の専門職として幅広い分野で実践することを想定し、優れた実践を行う幼稚園、小学校、現代美術家と協働する保育園、ハンセン病療養所内の保育園の実践を紹介し、それらを通して、支援のあり方について考察する課題を課した。

アンケートにて、課題数が多いとの意見が出されており、検討した結果、課題数や内容量に特段負担がかかるところは現時点で見あたらないが、提出期限や方法は再考の必要があると考えます。

今後も、社会における保育士の役割と専門性について広く捉えることができるような、体験的に学べる授業を行うこと、そして、授業構成と内容を精選し、効率的かつ効果的な進捗に努めたい。

社会福祉学科介護福祉専攻 教授 高木剛

介護過程A（講義）、認知症の理解Ⅰ（講義）、認知症の理解Ⅱ（講義）、介護福祉論Ⅱ（講義）、
発展介護過程（講義）

I. 授業の目標・工夫など

1) 介護過程A

授業の目標は、介護過程の目的・意義、展開プロセス、チームアプローチ等について理解するとともに、これらを他者に説明できることである。

学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、身の回りの出来事を題材とした事例問題の作成、練習問題の作成等の工夫をした。

2) 認知症の理解Ⅰ

授業の目標は、認知症の人を全人的にとみることにより、適切なケアについて考えるとともに、認知機能障害とはどのような状態なのか、また、多職種連携による認知症の人や家族への支援の必要性などについて説明できることである。

学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材（DVD等）の活用、最近の新聞記事の紹介等の工夫をした。

3) 認知症の理解Ⅱ

授業の目標は、認知症の種類やその代表的な症状、中核症状と行動・心理症状（BPSD）、認知症の人のケアの基本的原則等について理解するとともに、これらを他者に説明できることである。

学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材（DVD等）の活用、最近の新聞記事の紹介等の工夫をした。

4) 介護福祉論Ⅱ

社会福祉士及び介護福祉士法の概要、職業倫理、リスクマネジメントなどについて理解するとともに、これらを他者に説明できることを目標とした。

授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材（DVD等）の活用、最近の新聞記事の紹介をする等の工夫をした。

5) 発展介護過程

授業の目標は、介護実習における介護過程の実践的展開を目指し、これまでに修得した知識・技能を活用すること、また、チームの一員として介護過程の展開に係る意見交換等を行えること等である。

学生の介護過程展開の力量を高めるために、複数の教員ごとに小グループを編成し、グループ内で発表したり意見交換等ができるよう工夫した。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

1) 介護過程A

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.76～4.82であり、全ての項目において学科・専攻の平均点（4.45～4.53）を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。

今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実行していきたい。

なお、例年、学生からのコメントが記載されているが、今回はなかった。

2) 認知症の理解Ⅰ

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.50～4.59であり、全ての項目において学科の平均点（4.45～4.53）を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。

また、学生のコメントとして、「認知症のイメージが変わった」「毎回復習と生徒の質問に細かく答えてくださり、うれしかった」「小さな質問にも丁寧に、皆の前で応えて下さった」「わからないところを毎回詳しく説明してくれた」との記載があったことから、学生の満足感を得ることができたと考える。

3) 認知症の理解Ⅱ

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.76～4.86であり、全ての項目において学科の平均点（4.45～4.53）を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。

また、学生のコメントとして、「声がハキハキでいい」「生徒に思いやりがある」「楽しかったです」との記載があったことから、学生の満足感を得ることができたと考える。

今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実施していきたい。

4) 介護福祉論Ⅱ

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.65～4.74であり、全ての項目において学科の平均点（4.40～4.42）を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。

また、学生のコメントとして、「ステキな先生です」「楽しかった」との記載があり、授業の工夫等により、学生の高い満足感を得ることができたと考える。

一方で、「理不尽だと思った」との記載があったが、具体的な内容が不明なため対策を講じ

ることが難しい。

5) 発展介護過程

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、3.81～3.92 であり、全ての項目に置いて学科の平均点（4.40～4.42）を下回った。

この授業は複数教員によるため、個々の教員の評価を分析するのは困難であるが、評価内容を踏まえ授業のあり方、教え方などの改善を図りたい。

学生のコメントとして、「いろいろな人の記録を見ることで自分との違いがわかり、考えることができた」「ケアプランと介護計画の違いが良く分かった」「丁寧に授業が進められて、理解し易かった」との記載があったが、一方で「生徒が間違いを指摘すると言い負かそうとするのはどうかと思う。言いにくなる」との記載もあった。少しで学生の満足感を得られるよう、他の担当教員とともに考えていきたい。

学科・専攻：社会福祉学科・介護福祉専攻 職名：教授 氏名：立花明彦
対象科目：障害者福祉論（講義）、障害者の生活の理解Ⅰ（講義）、障害者の生活の理解Ⅱ（講義）、障害とコミュニケーション技法（演習）、リハビリテーション（講義）

昨年度、介護福祉専攻の1年生に開講した「障害者の生活の理解Ⅰ」の評価結果は、「教え方」「総合評価」「あなたの取り組み方」において、筆者の教員生活の中で初めて平均値を0.02～0.2ポイント下回り、驚くと同時に少なからず動揺した。そこで、これを受講した学生が今年度に履修する筆者担当科目「障害者の生活の理解Ⅱ」では、前年の結果を意識し授業を展開した。とはいえ、授業を進めていくうえで目立った改善をしたわけではない。

授業では障害者の実像を理解する一助として、時折テレビ番組から関連する内容があればこれを録画し用いた。また新聞には、障害者に関わる記事がしばしば掲載されるので、必要に応じて取り上げ、問題点を指摘したり、解説したりした。そのうえで、学生から意見や感想、質問などを書いてもらい、それを翌週の授業で紹介し、教員のコメントを加えたり、質問に答えたりした。これらは従来から筆者が行なっていることで、もちろんビデオや新聞記事の内容は年によって異なるが、方法としては目新しいものではない。

前年と比べると、映像の教材やその日の授業のテーマに関連した物を提示することは多かった。これらの取り組みは、「授業のあり方」4.57（学科平均4.53）、「教え方」4.56（同4.52）、「総合評価」4.50（同4.45）、「あなたの取り組み方」4.49（4.48）の結果となって現れた。

数値としては平均を僅かに上回っているが、学科での平均値とほぼ同じである。

ただ、科目は異なるものの、同一の学生の科目で数値的に回復したことには安堵している。自由記述欄には「最後のユニバーサルデザインの授業は特にとてもおもしろかったです」「ユニバーサルデザイン、気づかないことばかりで驚きました」「筋の通った話や考え方を人として一人の障害をもっている方として聞いていて、とてもおもしろかったし、興味深いと思った」「誰に対しても平等に、真摯に接していたこと」「先生が授業で学生との対話を交えて進めていた点がよかった」「障害者に対するイメージが大きく変わった」「もう少し厳しくご指導していただきたい」などの意見が寄せられた。いずれからも、教員が授業を通じて目指すところ、意図としたことが少なからず学生に伝わっているようで安心している。

これ以外の科目で、通年で開講した「障害者福祉論」は、「授業のあり方」4.90（学科平均4.62）、「教え方」4.89（同4.59）、「総合評価」4.90（同4.55）、「あなたの取り組み方」4.58（4.49）で、昨年に続き高い結果になっている。

特に例年は低く、時には平均値を僅かながら下回ることもあった「学生自身の授業への取り組み方」も、平均値を0.08ポイント上回っていて、筆者自身驚くところである。また専攻は異なるが、同じ1年生の科目「障害者の生活の理解Ⅰ」でも「授業のあり方」4.85（学科平均4.42）、「教え方」4.87（同4.40）、「総合評価」4.80（同4.40）、「あなたの取り組み方」4.74（4.39）で、昨年よりも高かった。

教員の思い、ねらいとすることが学生に伝わり、彼らを刺激できたことの現われと受け止めており、さらなる向上を図っていききたい。実際、これらの数値を裏付けるように、自由記述欄には「吸収するだけでなく、自分自身と向き合い、意思を持って考えていくことが重要と考えさせられた」「視覚障害をもつ先生と関わることで自分が障害者に対する誤った認識や心の中の壁を小さく低くしてくれた。授業が始まったころのみんなと今のみんなとは、全く違うと思う」などの意見が寄せられた。

担当する科目は、資格取得のために必修であり、授業で含むべき事項が示されている。それらを教授しながらも、筆者であるからこそその授業を展開できればと思い教壇に立っている。

学生のコメントからはこれについても伝わったことが窺える。この方針も大事な柱として学生と向き合っていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:准教授 氏名:鈴木俊文

対象科目:福祉経営とリーダーシップ(講義)、介護福祉論(講義)、介護概論・介護技術(講義・演習)、基礎介護技術(演習)、発展介護技術(演習)、介護過程C(演習)、発展介護過程(演習)、介護実習指導ⅠⅡ、介護実習ⅠA・B、ⅡA・B、地域づくりの理論(講義)、社会福祉演習、保育実践演習・卒業研究

I 授業の目標・工夫した点

筆者の主担当科目である「福祉経営とリーダーシップ」は、本学独自科目として設置・開講されている科目である。

当該年度、カリキュラム改正によって新たに「チームマネジメント」が追加された。これを受け、当該科目をこのチームマネジメント科目にあてるべく、授業目標や内容の再考を行った。

具体的には、カリキュラム上教育に含むべき事項である「組織論」と「リーダーシップ論」を学ぶ講義系科目で整えることに加え、教育方法として研究成果をふまえた(実践事例を教材にした)ケース・メソッドを導入し、チームワークの基礎とマネジメント理論を実践的に学習できるよう工夫した。

一方で、例年課題となっているが、介護事業におけるリーダーやフォロワーとしてのチームワーク経験が不足する学生にとっては、授業で扱う事例教材からイメージを得ることが難しいという課題や、リーダーやフォロワーの立場・役割を疑似的に捉え、そこからいかに学習・考察を深めることができるかという点では、ひきつづき課題が残っている。

この点において、次年度以降も「介護実習経験」を材料にすることや、実務家を招いた講義を取り入れながら、介護福祉におけるチームの構造、役割等の理解を補強できる工夫を重ねたい。

また、筆者が担当する社会福祉専攻(介護福祉論、保育実践演習)、歯科衛生学科(介護概論・介護技術、社会福祉論)等の他学科における授業は、当該年度も介護技術に関心の高い受講者が数多く履修したため、介護技術演習や福祉教育演習の内容を追加した。

あわせて医療・保健・福祉に関連する制度改正をふまえて、実践事例を活用した教材開発にも力を入れた。

こうした演習や事例教材を活用した学習効果(満足度)が、アンケート結果全体に高い評価として表れていると考える。

II 自己評価と今後の課題

各評価項目の全体的な評価は昨年度と類似している中、発展介護技術については、学科・専攻平均点を下回る結果となった。

自由記述には「教員の説明が難しい」というコメントがあり、これが理由のひとつと考えられる。

学習内容や教育方法は例年と同水準のものであったが、複数教員かつグループ演習を中心とする授業特性からも、学生個々の状況に応じた指導を、教員間で連携して取り組んでいくことが必要である。

その他の講義系科目では、社会福祉専攻や歯科衛生学科での介護福祉論の授業評価が高い結果となった。これらは、介護福祉を「制度のみ」で学習せず、技術・福祉教育等の体験的な演習を組み入れたことが成果を生み出したものと考ええる。

自由記述では学生の気づきや学びに関する教員の助言や評価が参考になったことが数多く記されていた。この点から、演習を数多く取り入れている授業においては、授業中の教育的かつ支持的な対話が、学生の学習意欲や、理解度をあげる重要な要素であると捉え、今後も重視して取り組みたい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:講師 氏名:天野 ゆかり
対象科目:医療的ケアⅡ(演習)、介護福祉論Ⅰ(講義)、介護過程Ⅲ(演習)

医療的ケアⅡ

本科目は、医療的ケアの中の経管栄養に関連する基礎知識の講義、演習、技術確認が中心となる。

介護の学生が苦手な医療分野の科目ではあるが、終末期の医療やケアに伴う倫理的な課題のグループワークなども熱心に参加できていた。

演習では、各グループを4人の教員(非常勤2名を含む)が担当して指導にあたったが、細かなところで各教員の重視する点が違ったようで、学生が戸惑ったところがあったようである。この点に関しては、詳細なすり合わせが必要となる。

介護福祉論Ⅰ

本科目は、講義が中心であるが、学生自身の介護観を育むうえで重要な科目でもある。

講義だけでなく、グループワークや映像教材などによる意見交換など、自分の考えを示すこと、仲間の意見を聞くことができるよう内容に配慮した。このような取り組みが、高い得点につながったと考える。

介護過程Ⅲ

本科目は、4人の教員によるオムニバスとなる。科目の内容が多彩であるため、広く学べる反面、教員の担当する各講義・演習とのつながりが分かりにくいところもあったかもしれない。

私の担当は、精神科領域の介護過程であるが、隣接領域の看護の資料を用いながら、看護理論や看護課程との視点の違いや類似点など示しながら実施した。

学生は、それぞれの書き方、情報、解釈の視点の相違点に気づき、どういった支援が必要なのか考えることができた。(リアクションペーパーからも理解度がうかがえた)

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:講師 氏名:木林 身江子

対象科目:身体のおくみⅠ(講義)、介護過程Ⅳ(講義)、医療的ケアⅠ(講義)、
医療的ケアⅡ(講義・演習)、医療的ケアⅢ(講義・演習)

「身体のおくみⅠ」は、テキストに沿って授業を進め、補足が必要な部分は別途資料を配布して復習しやすいよう配慮した。全体的には学科・専攻平均点を上回り高評価であったが、期末試験の結果は例年よりも平均点が低かった。

受講する学生の学力に差が大きくあり、数人の学生からは授業の量・進度に関し「スピードがはやい」との意見もあった。このことから、次年度は、学生の理解度に配慮して進めることに留意したい。

章ごとにミニテストを取り入れたり、感想・質問用紙を配布して学生の疑問に答えるなど、授業への関心を高める工夫をしていきたい。

「介護過程Ⅳ」は、心臓、呼吸器、腎臓、膀胱・直腸、肝機能障害について、医学的知識に基づいた分析により適切な介護・生活支援計画を立案する能力を養うことを目指している。

レジュメは、1年次の「身体のおくみ」の復習を含め、図表を増やすなど、学生が理解しやすいよう更なる改善に努めた。

また、各領域の講義終了時には感想・質問用紙を配布し、質問に対しては、翌週の授業冒頭で回答するようにした。

自由記述の内容からは、概ね理解できていることが確認でき、学生の関心・理解は深まったと捉えることができるが、授業後の質問の数は昨年度学生と比較するとやや少なくなったと感じる。

学生が理解を深めながら具体的な質問が生まれるよう、授業内容を工夫していきたい。

また、今後は国家試験対策として、特に医療系問題が苦手な学生には、個別の対応も検討したい。

「医療的ケアⅠ」は、介護現場において医療従事者と連携しながら、経管栄養や痰の吸引などの医療的ケアを安全に提供できるよう、基本的考え方や知識・実施手順を理解することを目的としている。

学生たちからは、特に、日常的なケアの場面から起きている医療倫理に関する問題や終末期の医療的処置に関する課題についての関心の高さがうかがえる。映像視聴やグループワークは、これから介護福祉士になろうとしている学生たちに、必要な視点・思考・対応を考えさせ、医療的ケアへの関心をさらに高めることにつながったと考える。

また、30年度は最終講にゲストスピーカーを招聘した。学生からは、ゲストスピーカーの話しが、豊かな生と死について医療的ケアの視点から考える契機になった、といった内容の感想も聞かれている。次年度以降も、現場での取り組みについて授業に含めていきたいと思う。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」は、経管栄養、喀痰吸引の技術演習・技術試験を主な内容とし、これに加えて用手微振動やポジショニングなど関連する技術演習も取り入れている点に特色がある。

学生は、各グループで協力し合い、授業以外に休み時間を利用して練習をするなど、技術試験にも意欲的に取り組んだことで、全員が「医療的ケア基本研修」を修了することができた。しかし、技術の習得に時間を要する学生には、少人数のグループ学習だけでは不足し、個別の指導が必要と思われることから、今後よりきめ細かい指導を行っていきたい。

昨年度と比較すると「医療的ケアⅢ」の総合評価はやや低くなっている。

本授業は7月末から2月までと長期間にわたることから、目的・意図を明確に示しながら展開したいと思う。

学科：社会福祉学科 職名：講師 氏名：濱口晋

対象科目：コミュニケーションⅠ（講義）、コミュニケーションⅡ（講義）、介護過程Ⅲ（演習）、介護実習指導Ⅰ（演習）、介護福祉演習（演習）

I 授業の目標・工夫など

「コミュニケーションⅠⅡ」及び「介護過程Ⅲ」授業の目的は以下の通りである。

「コミュニケーションⅠ」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。

「コミュニケーションⅡ」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。

「介護過程Ⅲ」では、聴覚・言語障害のある利用者への介護過程の展開方法について説明できる。

これら3科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用・発展とそれぞれ位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

今年度も、特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や加齢性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、授業の中に演習を多く取り入れた。

多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、授業の中でDVD等の視聴覚教材を使用した。

また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。さらに、読話で実際に言葉を読み取る演習を行った。

例年行っている透明文字盤をグループで製作し、ロールプレイをした結果を発表する演習については、実施できなかったため、2年次の科目内で実施したい。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「コミュニケーションⅠ・Ⅱ」について

（Ⅰ 授業のあり方 平均昨年 4.08→4.22 範囲 4.08～4.35） 「（2）授業はシラバスどおり、計画的に展開されていた」は、昨年度 4.06 であったが、今年度 4.27 より評価が高くなり、やや改善した。過去には「授業時間の終了時間が遅い」という意見もあったため、授業の時間配分等には気をつけて実施した。

（Ⅱ 教え方 平均 4.06→4.19 範囲 3.88～4.27）（Ⅲ 総合評価 平均 3.95→4.15 範囲 4.04～4.15）

「(6) 教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「(9) 教員は、学生に対して誠実に対応していた」の項目は、『わかりやすかった』との自由記述もあり、やや改善した、『早口で話さない』『簡潔に話す』などを心がけた点がよかったと考える。今後も丁寧に説明していきたい。「コミュニケーションⅡ」についても、昨年の「コミュニケーションⅡ」に比べ、大幅に改善した。(Ⅰ 授業のあり方 平均昨年 3.64→4.34) (Ⅱ 教え方 平均 3.43→4.23) (Ⅲ 総合評価 平均 3.43→4.35)。

今年度も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものとなるように、授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、柔軟に修正できるように改善していきたい。

「介護過程 C」については、「コミュニケーションⅡ」を応用発展した演習を実施したが、授業内容を再検討した結果、やや改善した。

専攻教員のオムニバス形式の授業であるため、新しいカリキュラムにおいては、教育内容そのものを専攻教員と一緒に見直していきたい。

「介護実習指導Ⅰ」については、評価全体において、4.04～4.54 昨年度 3.94～4.14 に比べて大幅に改善した。

実習指導のため、介護実習や実習施設のことが具体的にイメージできるような、わかりやすい授業を心がけていきたい。

一方で、実習指導の教育内容そのものではなく、「遠方過ぎる」や「指導体制が適切でない」など、実習施設と希望施設が合っていないと感じた学生も多く、実習先の配属検討を見直していきたい。

「介護福祉演習」については、評価全体において、4.18～4.22、昨年度 4.29～4.53 は、評価がやや低下したが、平成 30 年度は、学力評価試験や介護福祉士国家試験の受験義務化 2 年目の年度であった。そのため、授業外にも、自主的に取り組む姿勢もみられた学生も増えてきた。今後も学生が自主的に継続して勉強できるような工夫を考え、実施していきたい。その一方で、1 年次の知識が不十分のまま、2 年次や卒業を迎えている学生も増えてきたため、介護福祉士養成の教育内容や教育方法についても、必修の専門科目担当教員と一緒に考えていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:助教 氏名:安瓊伊

対象科目:応用介護技術(演習)(天野ゆかり、秋山みゆき、杉山真由、増田佳美)

I 授業の工夫

本科目は、介護のあらゆる場面に汎用できる介護技術の実践力を養うことをねらいとする。教員は介護技術について理論的根拠を講じながらデモンストレーションを実演し、学生は介護技術の習得を目指してグループで利用者役と介護者役を担って演習する演習形式の授業である。

授業参加を促す工夫として、まず、協力して円滑に演習できるグループ編成を行い、演習の際に複数の教員が身近で些細な指導を行った。

介護技術のデモンストレーションは学生の理解を高めるよう事前に教員間で確認をして実演した。また、授業後に学生に自己評価シートに演習時の感想や質問を書いて提出させてコメントを記入してフィードバックを行い、授業内容の理解を高めるよう工夫した。さらに、授業態度やレポートを成績評価に反映して、授業参加を促した。

成績評価の工夫として、筆記試験で根拠を理解したかを、複数回の実技試験で技術を習得したかを評価し、実技試験のフィードバックを行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業アンケートの集計結果において、「I 授業の在り方」、「II 教え方」、「III 総合評価」の平均点は、学科・専攻平均点を上回る 4.48～4.76 の分布を示し、良好であった。

実践的授業内容に興味や関心を持ち、学生がグループで取り組む演習形式の授業であるため、グループメンバー同士の演習をととして学習への意欲向上や動機づけがあったと思われる。

他設問項目より平均点が低かった「II 教え方 6 教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた。」(平均点 4.48) については、2 コマ連続授業ではあるが、演習を含むとタイトな時間となり、学生の理解状況を確認しながら授業を進めることが難しかったためかと思われるため、自己評価シートに上がってきたことについて翌週の授業の中で全体にフィードバックを行い、改善していきたい。

学生の自由記述にあった、「授業の終了時間が遅い」については、授業の終わりに自己評価シートを作成する時間があり、一部の学生は実習室の掃除があるので、時間内に終わらなかったことがあったかと考えられるため、時間配分に留意して進めていきたい。

今回のアンケートでは、テストに関する改善要望が多かった。

筆記試験の範囲は曖昧であることについては、試験を期にもう一度学んだ内容を振り返って復習をするようにしたいため、筆記試験の範囲を学んだ全ての内容にしている旨を学生に説明して伝えていきたい。テキストを含めると、確認することが多くなるため、授業中に使用した配布物やレポート課題を中心にすることを検討していきたい。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望等

応用介護技術の授業には複数の教員が指導しているので、疑問点などがあるときには積極的に質問をして自分の学びを高める。授業中に質問できなかったときには、毎授業後に書く授業評価シート「教員への質問等」欄に記入して提出してほしい。

授業中は時間のある限り演習を繰り返す、また授業時間外にも実習室を使って演習を行い、技術を習得するなど、積極的な姿勢で授業に臨んでほしい。

学科・専攻:こども学科 職名:教授 氏名:小林佐知子

対象科目:保育の心理学Ⅰ(講義)、教育心理学(講義)、心のしくみ(講義)※後半、発達と老化Ⅰ(講義)

1. 授業についての自己評価

授業のあり方「教え方」「総合評価」をみると、担当したすべての科目で、学科・専攻平均点を上回ることができた。ただし、「保育の心理学Ⅰ」は「あなたの取り組み方」が平均未満であった。

項目をみると、「自分は疑問点を必要に応じて教員に質問した」が比較的低かった。

昨年度と比べても授業の質は概ね維持できたと思われるが、改善点は残されている。

2. 今後の改善・工夫

授業のコメントカード等で疑問点を記述できるように工夫しているつもりだが、直接には質問しづらかったかもしれない。

自由記述欄で「楽しい授業だった」という記述がいくつもあり、何が楽しかったのかよくわからないが今後の励みにしたい。

3. 学生への要望等

真面目に授業に参加する学生が多く、グループワークにも積極的に参加するので、授業準備へのモチベーションが上がります。学生に感謝します。

「テストを簡単にしてほしい」という要望には残念ながら応えられません。

学科：こども学科 職名：教授 氏名：永倉みゆき

個人科目：教育原理（講義）保育・教育課程論（講義）幼児教育者論（講義）
保育内容（言葉）（演習） 保育内容（総論）（演習）

共同実施科目：教育実習指導・教職実践演習（共同）卒業研究（共同）

【個人科目】

I 授業の目標・工夫など

どの科目に於いても ①保育の理論的な理解（「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼稚園教育要領認定こども園教育・保育要領」等の理解）②理論を実践とつなげて理解できる事③理解を行動に繋げることが出来ること を目的に授業を組み立てた。

今年度はできるだけ学生が自分で調べることができるように授業を工夫した。

「教育原理」に関しては、図書館の本を使って調べ、発表するという形式をとったところ、学生が積極的に調べ、分かりやすく伝えることがよい学びにつながった。また、「幼児教育者論」に関しては、今日的な題材を取り入れるなどの工夫を試みたところ、よい評価を得た。

「保育・教育課程論」では、教育実習指導・保育実習指導と並行して、記録の取り方、計画の書き方などを具体例も盛り込みながら行ったが、また今年度も社会福祉専攻の2年生から「1年次に受けたかった」との声があり、来年度からは改善されるもののもう一年間は現状のままになる。ただ、気になったコメントとしては「自分は保育施設に勤めないのに指導案を書く意味がない」「就活や他の課題で忙しい時に大変だった」という意見が今年度は複数の学生（2年生）から出ており、資格を持つことの意味について、最初に説明する必要があると思われる。

「苦勞して書いたのだから指導案にコメントが欲しい」という要望があったが、講義科目でもあり、また書き方の注意だけでなく内容について触れるとなると個別指導が必要になるため、ただのコメントではなかなか表せない。

聞きたい人は個別に聞きに来て欲しい旨毎年伝えるが、実際は学生も忙しくて来ることはほとんどない。

来年度は、学生同士で見合うなど（これもなかなか難しそうだが）工夫をしてみたい。

II 今後の改善・工夫について

演習科目については、おおよそ学科の平均に近いのでよかったのではないと思う。16「疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目がどの教科も低く、引き続き質問を引き出す工夫や質問しやすい雰囲気づくりなどを心がけたい。

講義科目「教育原理」「幼児教育者論」「保育・教育課程論」は、演習科目と同じく学科の平均に近いのでまずはよかったものの、どの点についてこのように評価しているのかがよくわからない面もあった。

また、毎年のことだが、「10」の実習科目のみ回答の意味がわからず回答している学生がいるため、こども学科科目からはこの項目はカットしてもよいのではないかと思います。

【共同科目】

「教育実習指導」

2年目の学生であり、教員の方も授業を作りながらの指導であったが、園の評価も併せて考えると、目的は果たせたのではないかと思います。

昨年の要望である「指導案例」「日誌の例」が欲しかったということについては、1期生のものを見せることが出来たことがよかったのではないかと思います。

「保育・教育実践演習」

授業の中でもアンケートを取って意見を聞いたが、その中でも「フィールドワークがよかった」という声が多かった。

今年は発表をポスター発表形式にしたが、昨年の発表形式よりよかったようであり、充実したまとめができたグループは良い学びが出来たと実感したようであった。

今年度の学生のポスターを来年度の参考に活かしたい。

「卒業研究」

例年のように「一人一人に的確なアドバイスがあって進めやすかった」「ゼミが充実していた」という教員への感謝の言葉があった。

学科・専攻:こども 職名:教授 氏名:朴淳香

対象科目:「保育表現技術Ⅰ(身体)」(演習)、「幼児体育」(講義)、「保育内容(健康)」(演習)

1. 授業の工夫

「保育表現技術Ⅰ(身体)」(演習):幼稚園・保育所・こども園で行われる子どもの運動遊びと身体表現について、学生が実技と演習を通して実践的に学べるよう、学習環境を整えた。

保育の現場で実際に活用されている遊具や教材を使い、学生が実践的な活動を通して、内容理解と同時に表現技術が獲得できるよう、授業を進めた。また、グループ活動を通してお互いの発想や意見を取り入れて取り組めるよう配慮し、協働して課題に取り組むプロセスを大事にした。最終的には、子どもの興味・実態に合わせた教材や遊具の選択と環境設定を考えられるよう試みた。

「幼児体育」(講義):各回の授業の目的と内容を明らかにした上で授業に入り、授業の流れがわかるようにワーク形式のプリントを準備した。

幼児期の運動発達の特性、なぜ遊びとして身体活動を行う必要があるのかなどについて、教科書に掲載の図表の中から、理解につなげやすいものを重点的に取り上げて、エビデンスから答えを導き出せるよう、丁寧な説明を試みた。また、数回に一度、内容について理解できたこと、疑問に思うことなどを記録したものを提出してもらった。

「保育内容(健康)」(演習)(こども1年):保育内容領域健康の基本的事項を講義したのちに、事例研究を多く取り入れ、学生自身が事例を読み解きながら、実際の保育の流れの理解や子ども理解につながるように授業を進めた。

事例研究については、テーマを変えて繰り返し行い、実習記録で考察を書く時の参考になるよう意識して授業を行った。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「保育表現技術Ⅰ(身体)」では、グループ活動を通じての協働学習スタイルで教材研究を行ったが、1年前期ということもあり、幼児の身体活動への理解が十分でないまま授業が進んだように思う。

教材研究と表現技術の習得である前に、幼児の身体活動の特性の理解に結び付く説明が必要だと感じたので、今後はこの点に配慮して授業を進めたい。また、授業で体を動かすことの楽しさを感じていた学生は多かったが、子どもの活動に保育者の身体性がどのように関与していくのかという視点を授業の中で十分伝えることも必要だと感じた。

講義科目「幼児体育」は、幼児の体育に関する知識の習得が中心の授業であるが、学生が習得した知識を保育にどのように結び付けていくかという点での考察を加える機会が少なかったように思うので、今後は改善していきたい。

演習科目「保育内容(健康)」では、学生は多くの実践事例に触れて幼児理解と保育方法についての理解が深められたと思うが、発達や指導計画という観点から事例を整理しなおすような取り組みを取り入れていきたい。

学科：こども学科 職名：准教授 氏名：副島里美

対象科目：教育の方法と技術（講義）・保育内容（環境：演習）・障がい児保育：演習

【授業についての自己評価と今後の改善 ・工夫】

授業の工夫・授業の現状

どの授業も視覚的に理解しやすいように、パワーポイントで教科書の内容をわかりやすくまとめ、学生にはそれを見るだけではなく、重要な箇所を記入するような、学生用のプリントを配布した。授業では、次回の講義場所を伝え、事前学習で読んでくるように伝えているが、その学習が成立しておらず、事前の知識がないために、戸惑いを感じ、授業を把握しきれなかった学生がいたと思われる。

演習に関しては、相当と思われる課題を出し、それをシェアすることで意見の多様性を見出すことを目標にしたが、“自分でやること”が精一杯になることがあった。また、グループでの課題を出したときは、課題をこなす量に学生間の格差が生じてしまい、不満を持つ学生がいた。

今後に向けての改善

- ・なるべく教科書に沿って話を進め、教科書のどこに書かれてあることについて説明しているのかを、明確になるように進行する。
- ・なぜ今この内容をやらねばならないか、という理由を明確に示していくことで、将来につながる感覚が持てるようにする。
- ・もう少しゆっくりと授業を進めるように配慮していく。
- ・学生のプリントの書き込みの量を減らし、学生が“聴くこと”に集中できるように配慮する。
- ・学生に出す課題の量を再考し、厳選していく。

学生に期待すること

本授業で行っている内容は、どれも実際の現場で行われていることである。しかし、実際に現場に入ってしまうと日々の業務に忙殺され自分を省みたり、保育の意義について考える時間は限られてくる。また、“他者の意見”は“その場”でしかきくことができない（すばやい対応が必要）。

そして、人には色々な意見がある。皆さん方が社会人（職業人）として成長していくため、大切な授業です。学生自身が多くの知識を“主体的”に臨んでいただくような態度で、受講してほしいと願います。

学科・専攻:こども学科 職名:准教授 氏名:藤田雅也

対象科目:「保育表現技術Ⅰ(造形)」(演習)、「保育表現技術Ⅱ(造形)」(演習)、
「保育内容(表現)」(演習)、「図画工作」(演習)、「介護レクリエーションⅢ」(演習)

I. 授業の目標・工夫

それぞれの授業の目標は以下の通りである。いずれの授業においても実践と理論の往還を通して、子供の成長や発達についての理解を深め、適切な指導と援助ができる、感性豊かな人材の育成を目指している。

○「保育表現技術Ⅰ(造形)」

子どもの造形活動を、日々の生活や遊びとのつながりの中で総合的に捉え、その活動を生み出す環境づくりや援助の在り方について、発達過程と照らし合わせながら理解を深める。

○「保育表現技術Ⅱ(造形)」

様々な素材や用具を活用した表現技法を体験的に学ぶ演習を通して子どもの造形活動を追体験し、指導を行う上での基礎となる造形能力を高める。

○「保育内容(表現)」

保育の内容としての5領域を関連させ、総合的に保育を展開するための表現領域の知識、技術、判断力、指導力を修得し、子ども理解に基づいた保育としての表現について学ぶ。

○「図画工作」

子どもの造形活動に関する知識や技能を高める。また、美しいものに目を向けたり、様々な出来事や表現に感動したりすることができる豊かな感性を身につけ、造形表現能力や実践的指導力を高める。

○「介護レクリエーションⅢ」

造形表現活動(描くこと・つくること・みること)を活かした介護レクリエーションを実践するための知識と技能を習得する。また、要介護者の立場に立った文化的な支援を行うことのできる力を養う。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

○「保育表現技術Ⅰ(造形)」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。

「Ⅱ 教え方」の項目については、当該科目平均点が4.90と高い数値であった。授業では、子どもの造形活動を育むための環境づくりや援助について体験的に学ぶ時間を大切にしたい。自由記述には、「保育現場に出たときに生かせる授業内容であった」「子どもへの声掛けや接し方について学ぶことができた」「説明が分かりやすくわくわくする授業だった」などが挙げられた。一方で授業内での演習内容が多く、時間が足りなかったという意見があったため、今後の改善点としたい。

○「保育表現技術Ⅱ(造形)」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。

「Ⅱ 教え方」の項目については、当該科目平均点が4.92と高い数値であった。

授業では、保育現場における実践事例を踏まえながら、様々な素材や用具を活用した表現活動について理論と実践を往還させた展開を心掛けた。自由記述には、「教員の肯定的な褒め方や指導方法が良かった」「作品を他者と共有できる時間があって良かった」「分からないことや質問に対して、丁寧に答えてくれた」「新しい学びが多くて勉強になった」などがあった。

○「保育内容(表現)」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ 教え方」の項目については、当該科目平均点が 4.94、「Ⅲ 総合評価」の項目については、当該科目平均値が 4.91 と高い数値であった。授業では、5 領域を総合的に学ぶオペレッタの制作と公演や、保育所及び幼稚園実習を想定した指導計画立案と模擬保育などを主な学習活動とした。

自由記述には、「図工が苦手だったが楽しく学ぶことができた」、「知らなかったことを知れて毎回楽しかった」、「子どもや保育者の目線に立った授業内容で、新たな発見があった」などが挙げられた。

○「図画工作」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。「教員の授業に対する熱意」、「学生の理解が深まるための工夫」の 2 つの設問項目については、当該科目平均点が 5.0 であった。授業では、季節をテーマとした題材や多様な素材・用具を活用した遊びや表現について理論と実践を往還させた学習を展開し、学生の実践的指導力向上を心がけた。

自由記述には、「毎時間の授業で、学生の興味を引き出す工夫がされていた」、「説明が丁寧に分かりやすかった」「苦手な図工を楽しむことができる授業だった」「オペレッタの時には、自分では思いつかないアイデアを丁寧に提案してもらえて勉強になった」などが挙げられた。

○「介護レクリエーションⅢ」

全ての項目において、当該科目平均点が学科平均点を上回った。授業では、できるだけ身近にある素材を取り上げ、素材の特性などについて実践を通して学ぶ時間を大切にした。

自由記述には、「新たな発想を知ることができておもしろかった」、「授業が楽しく、もっと授業を受けたい」などが挙げられた。

学科・専攻:こども学科 職名:准教授 氏名:松浦崇

対象科目:社会的養護(講義)、社会的養護内容(演習)、児童家庭福祉(講義)、
相談援助(演習)、人間関係と援助技術(講義:オムニバス)

I 授業の目標・工夫など

「社会的養護」「社会的養護内容」は、児童福祉施設や里親制度についての概要・実際の理解を深めることを目標としています。多くの人が幼い頃に通った保育所や幼稚園と異なり、施設や里親には馴染みがないことが多く、具体的イメージがもてない、理解ができない、興味がもてない、という思いを抱えることが多くあります。そのため、授業では、DVDなどの映像資料や、施設経験者の手記、里親の方の体験談を聞く機会を設けるなどして、イメージを膨らませることを心がけました。

また、施設実習に対する不安や不満も、そうした馴染みのなさや、イメージの違いから生まれてくることも多いため、施設実習指導では、子ども・利用者の立場から、施設の置かれた状況や施設実習の特色について伝えることを意識しました。

「人間関係と援助技術」については、全学共通科目という特色を生かし、他学科の学生とグループで話し合う機会を多く設けるようにしました。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

結果として、全体的には高い評価をいただくことができたと考えています。

自由記述では、「DVDを見ることでわかりやすく興味をもった」など、映像資料が参考になったという意見が多くありました。また、「説明がわかりやすかった」「発見のある授業でした」「プリントに書かれていないこともたくさん教えてくれた」など、説明の方法についても評価をいただくことができました。今後も、資料を効果的に活用しながら、丁寧な説明を心がけていきたいと思います。

「人間関係と援助技術」については、全学共通科目ということで、内容が一部の学科に偏らないよう気を付けて内容を吟味したところ、授業内容に対しても評価をいただくことができたため、安心しました。貴重な機会ですので、次年度以降の内容も、より精選していきたいと思います。

逆に、「疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目は、他に比べて低い結果となりました。コメントシートを活用のみでなく、より意見や質問を述べやすくなるような工夫していきたいと考えています。

III 学生の皆さんに対して

多くの方が積極的に授業に参加してくださり、私も、さまざまな形で学ばせてもらうことができました。興味をもってもらいにくい分野だからこそ、今後も、興味関心を高めていただけるような授業を心掛けていきたいと考えています。

学科・専攻:こども学科 職名:講師 氏名:山本学

対象科目:保育表現技術Ⅰ、Ⅱ(音楽)(演習)、音楽、音楽通論(講義)、保育内容(表現)

授業評価アンケートの集計結果、自由記述に対するコメント

[保育表現技術Ⅰ、Ⅱ(音楽)(山本学、カタヴァ美樹、田代千早、原川葉子、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷺巣貴乃、鈴木慶子)]

Ⅰではピアノ奏法の基礎と子どもの歌の歌唱を45分間ずつ、Ⅱでは応用ピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を45分学習し、選択音楽として45分、声楽、ギター、管打楽器、音楽療法、リミックスのいずれかを学習する。授業はレパートリーカードを採用し、独自の工夫を行っている。

集計結果は、Ⅲ総合評価では平均点をそれぞれ0.04、0.15ポイント上回った。学生の満足度を得られた要因として3つ考えられる。

一つ目は、各担当講師がそれぞれの音楽の専門分野を生かすことができる方式であり、学生にとって大きな学びであったこと、二つ目は、課題の量を授業担当者としては少なめに設定することで、学生にとってはちょうど満身に消化できる量であったこと、三つ目は、ピアノも選択音楽も学生が自分で学べいわゆるアクティブ・ラーニングのような方式が本学の学生に合っていたことである。

自由記述においては、良かったことの記述が多いが、課題が多いなどの不満もあるので次回の検討としたい。

[音楽通論]

音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。Ⅲ総合評価では平均を0.25ポイント上回った。

例えば、サン＝サーンス「動物の謝肉祭」のような標題音楽の標題を伏せて曲を聞き、作曲家と同じ視点に立って考えてみるなど、学生自身が音楽の深淵を少しでも垣間見ることができるような工夫を行っている。

初めて学ぶことが多く楽しかったなどの記述が多く、ありがたく思っている。

自由記述においては、ミュージカルシネマと音楽の関係の内容に関する関心が高い。モチーフの使用やセリフと歌のシームレスな移行は意識的に解説することで理解が高まる。歌の演習はあまり評判がよくないので次回はスクラップとしたい。

[音楽]

本授業は、音楽の楽典知識、小学校音楽科との関連などを学習する。学科平均を0.29ポイント上回った。自由記述に意見はなかった。

[保育内容(表現)]

総合評価は学科の平均点を 0.21 ポイント上回った。オペレッタの取り組み、模擬保育の組み立てなど、学生が主体的に取り組む内容が主となっている。特に、手遊びの実践が学生からの自由記述からも、役に立つと評判である。

学科・専攻：こども学科 職名：助教 氏名：名倉一美

対象科目：保育原理（講義）、保育内容（人間関係）（演習）、幼児理解（講義）、人間関係と援助技術（講義）

保育原理は、保育の原理原則に関する講義であり、学生が「保育」そのものの全体像をイメージできるような内容の提供を心掛けた。スライドや映像資料を用いながら、時にはワークも取り入れて授業を行った。学生の保育に関する基本的な理解について、一定の効果はあったと思われる。しかし、他の講義と内容が重なる部分も多く、全体的に講義内容の浅さが否めず、保育原理ならではの内容を選別し、より充実させることが今後の課題である。

保育内容（人間関係）では、毎回、グループワークを取り入れることにより、学生同士の対話の中から多様な気づきが生まれるよう授業を展開していった。こうしたことにより、学生が幼児期の人間関係の発達や学習、そのための援助について、自ら考え理解する場を提供することはできた。しかしグループワークのテーマによって充実度に差が生じていたため、今後はテーマ設定について再検討していきたい。

幼児理解では、複数の保育実践事例を取り上げて事例分析を中心に講義を行った。学生にさまざまな事例の資料を配布し、それを読むことで自ら考え気付くワークを取り入れたり、必要に応じてグループワークを行い、他の学生との対話を通して新しい気づきを促したりした。

実践的な内容は、その後の実習等にもいかせるものであり、学生のニーズにある程度は答えることができたと考える。しかし、保育内容（人間関係）と内容が重なることが多く、今後もそのつながりを整理することが必要である。

人間関係と援助技術は、4回のみを担当であったが、3学科の学生が受講するものであり、自分の専門分野である保育と関連付けながらも、多様な関心を持つ学生に対応できる内容となるよう心掛けた。

多様な学生がいるからこそそのグループワークも取り入れたことが、効果的であったと思われる。今後はより多様性に対応できる講義内容を模索していきたい。

学科名： 社会福祉学科 職名： 非常勤講師 氏名： 飯塚哲男
対象科目： ソーシャルワーク演習 1

I、①授業の目標・②工夫など

1-①『 授業の目標 』

対人専門職（保育士、社会福祉士等）を目指し、クライアント（利用者等）に対する、聴く力・説明する力・質問する力・チームアプローチ（多種職協働・連携）が発揮できるよう言語・非言語的コミュニケーションを踏まえ相談援助技術（ソーシャルワーク）の基礎理解を目標とした。

また、ソーシャルワーク過程における専門用語であるインテーク（初期段階におけるコミュニケーション・アセスメント（情報収集及分析）等の理解と活用方法をグループワーク演習した。そこで対人援助職に不可欠なバイステックの7原則を踏まえ、共感と自己価値の学び・気づきを図りました。

1-②『 授業の工夫 』

演習開始時に具体的な授業目的、目標の明示と説明を意識した。ソーシャルワーカーとして自己覚知（価値・倫理観）と共感的な理解を共通テーマとした。

高齢者、障害者、児童等の事例教材（レジュメ、DVD、振り返り用紙など）をグループワークで学びを中心位置づけた。学生同士や学生と講師との積極的なスーパービジョンが図れるように配慮した。

授業終了20分前に振り返り用紙へ記入してもらい演習効果が向上できるよう取り組んだ。振り返り用紙に関しては、毎回講師より学生ひとりひとりにコメントを記入し言語的コミュニケーションを深めた。結果、学生は自らが演習参加に対する姿勢・態度は、毎回真剣で積極的な意欲をもって参加してくれました。

II、授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

学生評価アンケートでは、1.授業のあり方：『授業目的、目標が明示させていた。』・『授業の目的、目標から見て、授業の難易度は適当であった。』等は、5.00 評価であった。

また、II 教え方：『教員は、学生の理解が深まるように授業を工夫していた』・『教員は、学生に対して質問への対応、レポートへのコメント。』等は5.00 評価であった。

学生自身の取り組み方は、『自分は、この授業を理解するために努力した。』等は、4.91 評価だった。但し、『自分は、疑問的を必要に応じて教員に質問した』が3.58 評価だった。

疑問点をあえて提示して再度、内容を深める仕組みの必要性を感じた。

アンケート自由記載欄では、『将来の自信とやる気につながった授業だった』・『実際にいくつもの演習を通じて対人援助について学ぶことができ、1 つひとつが印象に残りました』・

『自分達が動いて授業を進めていく場面が多かった』との意見が多数ありました。

ソーシャルワーク演習ⅡⅢと通年2年と続きます。

特に演習Ⅲを担当する教員としてスーパービジョンにおける支持的機能を根底に教育的機能がまだ不十分なところがあります。

教員に対する質問明確化できるよう振り返り用紙に疑問点等の記載欄を設け、生徒個々へのコメント充実やクラス全体で共有できる演習を行っていきます。

今後もアイスブレイキング、テーマに応じた導入講義、グループワーク、振り返り用紙活用、教員同士の連携・協働を含め学生にとって意欲向上となるよう努めます。

学科名： 社会福祉学科 職名： 非常勤講師 氏名： 飯塚哲男
対象科目： ソーシャルワーク演習 3

I、①授業の目標・②工夫など

1-①『 授業の目標 』

3名の講師の協働によりソーシャルワークⅠ・Ⅱのケースワーク・グループワークに引き続きソーシャルワーク専門職（保育士、社会福祉士等）養成として、総合的・包括的な援助活動、相談援助の過程力、相談援助実践の方法、地域の課題が意識できるスキル向上を目標としました。

個人・家族・地域の事例を活用したソーシャルワーク過程におけるインテーク・アセスメント（課題・ニーズ等）・プランニング・モニタリング等の理解を図りました。

コミュニティを基盤とするソーシャルワーク活動（地域住民に対するアウトリーチとニーズ把握、地域福祉計画、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発等）の基礎理解を図りました。

1-②『 授業の工夫 』

総合的・包括的な援助活動、バイステックの原則を踏まえ相談援助の過程力、コミュニティを基盤とするソーシャルワーク活動等を中心に授業毎にポイント明示し、導入時にテーマ毎の必要知識を説明しました。

ソーシャルワーカーに必要なソーシャル倫理綱領を踏まえた価値・倫理観について振り返り総合的・包括的な援助活動、相談援助の過程力の理解を図りました。

高齢者、障害者、児童等の事例教材（レジュメ、DVD、振り返り用紙など）を活用、グループワークで意見交換等が促進できるようグループダイナミックスにて相乗効果を図っていきました。

学生同士や学生と講師でディスカッション設定を図り演習終盤に振り返り用紙に記入してもらい後日講師が学生ひとりひとりにコメントを記入しました。

II、授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

学生の演習への参加姿勢・態度が真剣で意欲をもって参加してくれた。

1. 授業のあり方『授業は、シラバスどおり、計画的に展開されていた。』『教員から与えられた課題（宿題・レポート）は、質・量ともに適切であった。』等は、4.79の評価であった。

II 教え方『教員の授業に対する熱意が感じられた』『教員は、学生に対して質問への対応、レポートへのコメント。』等は4.84だった。

III 総合評価『この授業は、新たに考えたり学んだりすることが多い内容であった。』『自分自身は、この授業を受けて、この分野に対する興味・関心が増した。』等は、4.79と高評価

だった。

学生自身の取り組み方は、『自分は、この授業に意欲を持って受講した。』・『自分は、この授業を理解するために努力した。』等は4.74～4.84だった。3名の教員がスーパービジョンにおける学生に対する支持・教育・管理的機能が発揮できました。

今後も教員同士の協働と連携を強化し、学生の参加意欲と対人援助職として社会福祉に関する事例を考察する力が向上できるよう、ロールプレイ、振り返り用紙、事例をグループワークで学ぶ工夫を充実させソーシャルワーク演習の内容充実に努めます。

非常勤講師 岡村由紀子

対象科目： 乳児保育

例年と変わらず、どの学生も熱心に意欲的に取り組む姿が多くあり。教員としても授業の充実の為学ぶ事が多い1年でした。

特に授業を振り返り記入する「授業カード」は、授業の中での「一人ひとりの学び」がよく分かるもので、毎回の返信欄でのコメントと次回の授業に生かし、授業の充実に繋げていきました。

総合評価から、保育と言う仕事への興味・関心と共に、深く考える力を持つ保育者養成を願って授業を行っていますが今年も、ねらいが一定に達せられていることが分かり、現場でこれらの力を発揮し、質の高い保育を創る保育者になることを期待しています。

授業の板書の仕方に工夫をし、学生の取り組みが一方的にならない様、工夫をしていきたいと思っています。

非常勤講師 氏名：久保幸恵

対象科目：社会調査の基礎

授業評価アンケートの集計結果はおおむね良好だったので、①私が授業で工夫していることと自己評価、②授業の今後の改善点、③学生さんたちに期待すること、の3点について書きます。

① 私が授業で工夫していることと自己評価

授業は、学生さんたちに「社会調査って、こんなに楽しいんだ!」と思ってもらえることを第一の目標として行っています。作業グループは仲のいい友だちと作ってもらうようにしていますし、各グループのテーマも自分たちの興味のあるテーマを好きに選んで良いことにしています。私は調査の進行状況や手法、手法の基となる理念などについての指導はしますが、作業自体は完全に学生さんたちの手に委ねています。このような授業の方式にしてからは、学生さんからの評価も良く、先ほど挙げた第一の目標を達成することができているのではないかと自負しています。

② 授業の今後の改善点

現在の授業で問題があるとすれば、質的調査の分析方法の説明がわかりにくいことが挙げられます。学生さんたちの間でも戸惑いがあるようで、私の説明した方法には必ずしも従わず、自己流の分析をしているグループも見受けられます。

質的調査の分析手法は意外と難しく、私はいくつかある手法の中で簡単なものを説明していますが、それでも学生さんが納得できるほどの単純で、明快なものではありません。どうにかして、学生さんにも分かりやすく、使いやすい手法の説明ができるように改善を加えることが必要だと考えています。

③ 学生さんたちに期待すること

私の授業を取っている学生さんたちは、毎年のように、作業に熱心に取り組んでくれますし、自分たちで工夫をこらした調査の実施、分析、発表に積極的で、これ以上の期待をすることはありません。ただ一点、ささやかな願いがあるとしたら、自分たちで工夫するのは大歓迎なのですが、独自の工夫をするあまりに、私が説明をした手法の一部をスルーしてしまう学生さんもいます。

私の説明は、社会調査の分野では最も基礎的な手法や理念に関するものなので、できれば説明に沿って作業をしてもらえれば嬉しいです。もちろん、そのような作業をする時間的余裕がなかったり、私の説明が十分にわかりやすいものでなかったり、より適切だと思われる手法が他にあったりするかもしれませんので、ささやかな願いにとどめておきたいと思います。

『地域文化論』

担当 繁原幸子

平成 30 年度 授業評価アンケート集計結果に対するコメント

『地域文化論』は歴史であったり、方言などの言語であったり、生業であったりと様々な切り口で論じることができるのだが、ここでは民俗学の手法で地域の文化を読み解いている。50年近くになるフィールドでの民俗調査の経験から静岡という地域の特徴を表し論じているのだが、嘗ての日本の習俗や行事の話が多く出てくるので、学生によって興味のあがるなしがはっきりしていることを痛感する。

親や祖父母から風習や決まり事、祭礼の話などを聞いている学生はコメントシートの段階で、多くのことを書き込んでくる。

毎年あまり興味の少ない学生にはなるべく多く説明をするしかないと思っている。またなるべく現在の話に近いテーマにする様ところがけていきたい。

民俗学は各人が短期、長期で自分の調査地（フィールド）をもち、年長者から様々なことを聞くことが重要なことなのであるが、講義中に何度も説明を繰り返しているにも関わらず、教員が自分の話ばかりするという学生がいたのには驚かされた。

自らが多くのデータを集積し、その結果を他地域と比較したり、その地域を別の角度から観察したりするのが民俗学なので、本などの資料も大切なのだが、何年もかけて自分が集めて歩いたデータが重要になってくる。

一部の学生には、まだこのあたりの説明が足りなかったかもしれない。

毎時間、映像やパワーポイントでわかりやすく説明したつもりであったが、理解できない学生には映像や資料の他にもノートをとらせながら、懇切丁寧に説明を重ねることが必要と思われた。

海外でも何年もかけて、調査を重ねてきたが、日本と共通する事例もあり、大変に興味深いのだが、こうした海外の例を話す時は特に気を付けて、何度もなぜこの話をしているのかという説明が必要と思われる。そのために来年度は一回ごとに印刷している資料を若干減らして、余裕ある授業を心がけたいと思う。

非常勤講師 氏名：末永 美雪
対象科目：生活支援技術Ⅲ（演習）

当該授業は、全ての項目で学科・専攻平均点を上回っており、良好な結果を得られた。
授業評価アンケートの集計結果とそれに対する項目別のコメントを以下に述べる。

I 授業のあり方：学科・専攻平均点、4.42 に対し、4.83 であった。

この授業は 15 回すべて授業内での講義と調理実習で構成されている。社会福祉学科介護福祉専攻の学生として備えるべき、栄養学・調理学の知識と技術力の習得を目指した。学生はおおむね調理経験が少なく、かつこの分野は個人差が大きい特徴がある。そこで、包丁や調理器具の扱いが不慣れで、調理技術が低い学生でも、グループ内で互いに協力することで出来る内容を想定して実施した。今後難易度・課題のより適正化を検討したい。

II 考え方：学科・専攻平均点、4.40 に対し、4.65 であった。

教員は学生の理解度に配慮して授業を進めていたが、4.54 であった。説明とデモンストレーション時に理解できたかの確認をより丁寧に行い、改善したい。

レポートのコメントは返却の際個別に記載したが、より学生にとって満足度が感じられるような表現を工夫したい。

III 総合評価：学科・専攻平均点、4.40 に対し、4.73 であった。

内容をよく理解できたかという項目で、あまりそうは思わないと答えた学生がいたので、授業の配布資料を検討することで改善したい。

感想で失敗した場合の対応について記述があった。食材料は人数分しか用意していないので、失敗した場合は作り直す材料も時間のない。失敗することがないように丁寧に指導していきたい。

制限された時間内での安全な授業運営を教員と助手の 2 名で担当している。教員間で事前打ち合わせを十分することで、授業時間内での教員間の会話が多くないように心がけていたが、学生にとっては冷たい関係と誤解されたようだ。授業ガイダンス時に説明して理解を促したい。

非常勤講師 氏名：杉山弘卓

対象科目：福祉経営とリーダーシップ（講義）

I 授業の工夫

質の高いケアを提供するには、介護スタッフの個人レベルで介護技術が高いだけでは実現できません。それには介護スタッフが働く、広い意味での環境にも関心を持つ必要があります。例えば、事業所の掲げる理念や介護観、あるいは職場スタッフ同僚との人間関係。またスタッフの健康を守る事業所のセーフティネット等々組織の質がケアの質に関係しています。

この科目は、「マネジメント」をキーワードに、組織の視点から、質の高いケアの実現を考えていきます。主に鈴木俊文先生が「リーダーシップ」について、杉山が「福祉経営」の観点から授業を展開しています。

現場の職員間にありがちな場面 4 事例をグループディスカッションする事で、仕事としての介護スタッフの立ち位置を深めてきました。

II) 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「現場の具体例が提示されてわかりやすかった。イメージしやすかった。」というコメントの一方、マネジメントについての説明や理解については、十分に伝わり切れなかった印象を授業評価から読み取りました。

マネジメントという単語は、介護福祉の中ではまだまだ使い慣れていない言葉です。提供事例の内容、またグループディスカッションの進め方等を見直し、この授業への関心をより持ってもらえる様、工夫と準備をしたいと思います。

非常勤講師 氏名：高井 由美子

対象科目：身体のおくみⅢ

授業評価アンケートについての報告書

授業の工夫

- ・ 医療に対する苦手意識が生まれないように、パワーポイントでの講義方式とし、視覚を通して印象に残るようにしてみました。
- ・ 国家試験に必ず出題される分野のポイントをふまえ講義を進行しました。
- ・ 疾患の症状や支援ポイントがわかりやすいように、DVD や動画を多く取り入れました。
- ・ 健康、命、生活を守り、支えるということについて知識という側面からばかりでなく、こころで感じて考えてもらえるように、ドキュメント等の映像も使用しました。
- ・ これからの時代は、看取りも含めた生活支援が必須となるため、学生自身の死生観を問う講義にも力を入れました。
- ・ 実習やプロとなってから必要な視点や考え方のもとになる根拠について、現場の具体例をあげて講義を行いました。
- ・ 最終講義では、いくつかの事例をもとにグループワークでケア展開を考える講義を行いました。
- ・

授業についての自己評価

- ・ レジュメのポイントがわかるように今年も穴埋め式にする予定ですが、もう少しポイントがわかりやすいよう工夫し、講義を行いたいと考えています。
- ・ 解剖生理、各疾患の病態をわかりやすく説明していけるように努力します。
- ・ 映像を通して感じたり、考えたりする授業内容は有効であったと思います。
- ・ 自身の実践から学んだことを事例としてあげ、観察ポイントやケアへの結びつきを話すことは、学生にとってもわかりやすいということがわかりました。
- ・ 最終講義のグループワークでのケア展開は、ポイントをつかんだケアを考えることができたように思います。
- ・

今後の改善・工夫

- ・ 講義の進行スピードは確認していきたいと思います。
- ・ レジュメについては、穴うめで大切な部分がわかるように今後も書き込み式にし、前年度をふまえて更に改善していきます。
- ・ 健康面を考えた支援とはどういうことなのか、ドキュメンタリーや映像も組み込み、最終的には学生たちがそれぞれに考えることができる講義を組み立てます。

学生に期待すること

- ・ その人の暮らしの支援とは、原疾患や障がいがあっても個々に望む「あたりまえの暮らしを守る」ということです。介護福祉士という仕事において、それぞれの対象の持っている病気を悪化させないように、そして少しの体調の変化にも気づいて適切な対応や助言をしていくことは、暮らしを守るうえでとても重要なことだと思います。その重要性を理解し、少しずつ身につけていってください。

非常勤講師 氏名：八谷 重之 （はちや しげゆき）

対象科目：福祉サービスの組織と経営（講義）、

本科目は社会福祉士受験資格を得るための必修科目です、しかも実務経験がない受講生にとっては社会福祉を「組織」や「経営」の視点で見る事に違和感を覚えることもあるかもしれませんが、社会福祉士の受験科目に「組織と経営」が入った事の意義を考えて見ましょう。

非常勤講師 氏名：堀川 祐里

対象科目：日本経済論（講義）

半期の間、日本経済論の授業を受講していただきありがとうございました。受講生の皆様からのコメントをありがたく拝読いたしました。

コメントの中に、「最初は不安ばかりでしたが楽しく授業を受けることができました」というお言葉を見つけ、とても安心しております。

全 15 回の授業のうち、一番初めの授業で皆様には「日本経済論の履修登録理由」をお尋ねしました。その際に多かったのは、「選択必修科目であるため仕方がなく履修することにした」というものであったと思います。

確かにこの科目は、皆様が卒業までに身に着けるべき専門知識についての科目とは異なり、教養科目に位置付けられており、皆様がこの授業を履修登録した理由は尤もなものであると感じました。ですので、私自身は、経済学や日本経済論にあまり興味を持っていない皆様に対して、どのようにそれらに親しみを感じてもらえるか、ということに留意して授業を行ってきました。

そのような観点から、何人かの学生の方が書いてくださったように、楽しかった、良かった、経済学に興味を持ったという感想は、私にとっては非常に嬉しいものでした。

この授業では、以下の点に重きを置いてきました。それは、経済学というのは実は皆様にとってとても身近なものであることを感じてもらうこと、日本経済の歴史的な歩みについて基本的な知識を身に付けてもらうこと、そして何より、これから社会に出て生きていく皆様が将来どこかで助けてくれるだろう知識について知ってもらうことでした。

皆様にとって、専門科目で学ぶ知識が社会のたくさんの人々を助けるための知識であるとするならば、日本経済論で学ぶ知識は、皆様自身を助ける知識になってほしい、という考えです。

最終回でお話ししたように、私たちの労働環境における理想はディーセント・ワークが実現されることです。しかし、現実には「人間らしい」働き方は難しいものとなっており、今春もしくは来春から社会人になる皆さんには厳しい現実が待っていると思います。そのような現実の中で、私たちは自分で自分を守り、力強く生きていかなければなりません。その際に、労働を中心として経済に関する知識は皆様の糧になるはずだと信じています。

私の 1 番の願いは、皆さんが授業で学んだような労働問題の被害者にならないことです。しかしながら、もし社会人になって働く中で困難に直面したときには、この授業の中で学んだ過去の労働者の経験からヒントを得てほしいと思います。

皆様が社会人としてジェンダー・フリーに能力を発揮し、仕事を理由に命を落とすことなく、それぞれの目標に向かって生き抜いてくださることを願ってやみません。

平成 30 年度 F D 委員会

委員長 吉田直樹

委員 林 恵嗣 (一般教育等)
野口有紀 (歯科衛生学科)
天野ゆかり (社会福祉学科)
藤田雅也 (こども学科)